帝國讀本

新制第一版

卷七

375.9
Ha7
資料室

41573
教科書文庫
4
810
41-1931
2000301556

文部省檢定濟

昭和六年十二月二十三日　中學校國語漢文科

文學博士　芳賀矢一　編
文學博士　上田萬年
文學士　長谷川福平　訂補

帝國讀本

新制第一版

東京　合資會社　冨山房發兌

375.9
Ha7

many

旅人

野田九浦筆

廣島大學圖書館

廣島大学
教
30751
図書

帝國讀本　卷七

目　次

一　をりふしの移り變り……吉田兼好…一
二　手折りし枝をしたふ春風……室鳩巣…四
三　詩人西行……藤岡作太郎…一〇
　　櫻咲く日本よ（自修文）……吉田絃二郎…一七
四　櫻あらそひ……（續狂言記）…二三
五　晩春の別離（詩）……島崎藤村…二六
六　奥の細道　その一……松尾芭蕉…三四
七　奥の細道　その二……松尾芭蕉…四〇
八　旅と宿驛……鳥野幸次…四五

九 北京から……田山花袋…五四
一〇 源三位……（平家物語）…六〇
文學と氣品（自修文）……六六
一一 小松内府その一……（平家物語）…七〇
一二 小松内府その二……（平家物語）…七四
一三 平家物語論……五十嵐力…七九
一四 青葉若葉（古俳句）……八八
一五 信濃路の旅……正岡子規…八九
一六 みとり日記……小林一茶…九七
一七 芭蕉と一茶……荻原井泉水…一〇三
一八 郷土の魅力……相馬御風…一一五
海を思ふ（自修文）……中村孝也…一二二
一九 芳流閣上の血戰……瀧澤馬琴…一二五

二〇 天地の心（短歌新調）……一三一
二一 流泉啄木……（今昔物語）…一三七
二二 美しき故國……矢代幸雄…一四一
二三 黄菊白菊（古俳句）……一四八
二四 四季小品……一四九
一 春雨……中島廣足…一四九
二 風鈴……香川景樹…一四九
三 きぬた……清水濱臣…一五〇
四 秋の山田……藤井高尚…一五〇
五 冬のこゝろ……伴蒿蹊…一五一
二五 江戸時代の學者と明治維新……一五二

廣島大學圖書之印

帝國讀本　卷七

吉田兼好[一]

一　をりふしのうつりかはり

をりふしのうつりかはるこそ、もの毎に哀なれ。[二]ものの哀は秋こそまされ」と人毎に言ふめれど、それもさるものにて、今一きは心も浮立つものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲なども殊の外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草萌出づる頃より、やゝ春深く霞みわたりて、花もやう〳〵氣色立つ程こそあれ、をりしも雨風うち續きて、あわたゞしく散過ぎぬ。青葉になり行くまで、よろづに唯心をのみぞ惱ます。花橘は名にこそ負へれ、尙梅の匂にぞ、古の事もたちかへり、こひしう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤のおぼつかなき樣したる、すべて思ひ捨てがたき事多し。

(一)鎌倉時代の文學者、歌人。正平五年(一三〇一年)寂、年六十八。

(二)「春はたゞ花のひとへに咲くばかりものの哀は秋ぞまされる」(拾遺集、よみ人知らず)

氣色立つ

名にこそ負へれ

おぼつかなき樣したる

(一)陰暦四月八日。
(二)賀茂祭。もと四月の中の酉の日に行はれた。
(三)六月晦日の大祓。なごしの祓ともいふ。
(四)平安時代の代表的小説。五十四帖。紫式部の著。
(五)平安時代の代表的隨筆。十二卷。清少納言の著。

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂り行く程こそ、世の哀も人のこひしさもまされと人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月、あやめ葺く頃、早苗とる頃、水雞のたゝくなど心細からぬかは。六月の頃あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるも哀なり。六月ばらへまたをかし。たなばた祭るこそなまめかしけれ。

（上原桃畝筆）

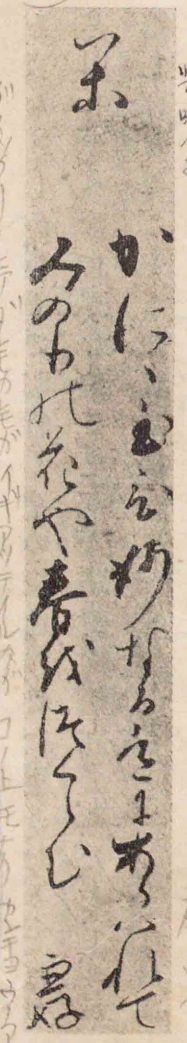
やうく夜寒になる程、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づく程、わさ田刈干すなど、取集めたる事は秋のみぞ多かる。また野分のあしたこそをかしけれ。言續くれば、皆源氏物語、枕草子などに事古りにたれど、同じ事また今更に言はじとにもあらず。思しき事言

(一)平安時代の代表的小説。五十四帖。紫式部の著。
(二)朝廷で十陵八墓に幣帛を奉られるその使。
(三)十二月十九日から二十一日まで三日間宮中に行はれた佛事。

わさ田
遣水
閑
すさまじ
あぢきなし
かいやり捨つべき物

はぬは腹ふくるゝわざなれば、筆に任せつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやり捨つべき物なれば、人の見るべきにもあらず。

さて冬枯の景色こそ、秋にはをさ〳〵劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白う置けるあした、遣水より煙の立つこそをかしけれ。


吉田兼好筆蹟

年の暮果てて、人毎にいそぎあへる頃ぞ、またなく哀なる。すさまじき物にして、見る人もなき月の、寒けく澄める二十日餘りの空こそ、心細き物なれ。御佛名荷前の使立つなどぞ、哀にやんごとなき。

事どもしげく、春のいそぎに取重ねて催し行はるゝ樣ぞいみじきや。

一告

(一)十二月晦日に行はれた鬼やらひ。

ことぐし

(二)徳川幕府の儒官。名は直清。江戸の人。享保十九年(一七三四年)歿、年七十七。義人錄、駿臺雜話等の著がある。

(一)追儺より四方拜に續くこそ面白けれ。晦の夜いたう闇きに、松ども點して、夜半過ぐるまで人の門たゝき走りありきて、何事にかあらん、ことぐしくのゝしりて、足を空に惑ふが、曉方より流石に音なくなりぬるこそ、年の名殘も心細けれ。亡き人の來る夜とて魂祭るわざは、この頃都にはなきを、東の方には尙する事にてありしこそ哀なりしか。かくて明行く空の氣色、昨日に變りたりとは見えねど、引きかへ珍しき心地ぞする。大路の樣、松立てわたして、花やかに嬉しげなるこそまた哀なれ。

―徒然草―

二　手折りし枝をしたふ春風

室鳩巢(二)

或時翁、前日節義の事を語り候ひしが、あとにて思ひ候へば、未だ申し殘して候。前日申しつる事どもにて考へて見給へ。盛衰榮枯は世の常なり。それによりて志を變へぬは、これまた士の常なり。若し

えりもとにつく

(一)中唐の詩人。字は景山。唐の貞元五年(西紀七八九年)に進士に及第し、年七十で致仕した。

時の模樣につきて覺悟を變じ、世話に言ふえりもとにつく樣にては、何をもて士と申し侍るべき。

水邊楊柳綠煙絲。
唯有春風最相惜。
立馬煩君折一枝。
慇懃更向手中吹。

これ唐の楊巨源(一)が楊柳の詩なり。この三四の句意、婉にして面白く覺え侍り。よりてその意を翁が詠める歌に、

なれて吹く名殘やをしき青柳の
手折りし枝をしたふはる風

楊柳の人に折られて、はや木を離れたりとて、春風のそれをよそにして吹きなば、いかに情なかるべきを、尙その手折りし枝を去りやらで、惜しみがほに吹くこそ、いと優しく覺え侍れ。古より忠臣義士の、盛衰存亡をもて心を變へぬに喩へつべく候。翁むかし源平盛衰記を讀みて、源氏の士には渡邊瀧口競、平家の士には彌平兵衞宗清

(一)和漢混合體の漢文で書いた鎌倉幕府の日記。五十一卷。

池魚の災

(二)第八十代高倉天皇の時代。(一八三七―一八四〇年)

倉皇

(三)清盛の第二子。壽永四年(一八四五年)壇ノ浦の戰に捕はれて、軍に近江の篠原に斬られた。年三十九。

が事を感ぜしが、また東鑑(一)にて、伊東九郎祐清が事を見て感じけるまゝ、三烈士の傳を半ば撰び置きしが、未だ稿を脫せざるうちに池魚の災にかゝり、その後二たび草を起す事なくうち過ぎし程に、今はその文をば跡もなく忘れ侍り。渡邊競は源三位入道賴政が所從の士には第一の者なり。然るに治承(二)年中、賴政、高倉宮に勸めて兵を起せし時、京師を急に發して、倉皇として三井寺に赴きしが、うち忘れてやありけん、競にかくと知らせざりし程に、競暫く猶豫して家にありしを、平宗盛(三)聞きて、日比競が魁偉なるを見て、おのが所從にせまほしく思ひしが、賴政が親臣なれば、請ふべき樣もなかりしに、このたび競ひとり都に殘りしと聞きて、「六波羅に參れ。」と人して言はせければ、參りけり。宗盛對面して、「汝今より我に仕へば、入道の恩にはまさるべし。」とて、小糟毛(こかすげ)といふ馬に貝鞍おき、乘りかへの料として遠山といふ馬を引添へ、黑絲をどしの鎧冑まで皆具してたびけ

時の花をかざしにす

眷顧

り。競畏まり賜はりて、ほくそ笑ひて罷り歸りぬ。一族、家人うち寄りて、「入道殿これ程の大事を思ひたち給ふに、ひとり取殘されしは眞實に遺恨なり。大將のかく語らひ給ふは辭み難し。時の花をかざしにせよ」といふ事もあれば、唯このまゝにてあれかし。」と言ふを、競「いやとよ、勇士の義さはあらず。」とて、宗盛はりたびける鎧著て、小糟毛に乘り、郎等七騎うちつれて、三井寺へとうち出でしが、六波羅の門前を通りし時、馬に乘りながら門の內へのぞきつゝ、高聲(かうじやう)に言入れけるは、「競こそ只今下し賜はりし馬に乘り、三井寺へ罷り越し候へ。御眷顧を蒙り候へども、三位入道の恩忘れ難く候へば、このたび死を共に致すにて候。御門前を空しくうち過ぎんはほいなく候へば、御暇を申し候。」とて、三井寺に至り、賴政と一所になりしが、その後宇治

室鳩巢

(一)忠盛の第五子。清盛の異母弟。母は池の禪尼。文治三年(一八四七年)歿。年五十五。

橋の合戰に潔く討死してけり。彌平兵衞宗清は平賴盛の士なり。平治の亂に、賴朝幼少にて賴盛の家に囚はれしを、賴盛の母老尼、清盛に乞ひて死を救ひけり。その時宗清、賴朝を朝夕にいたはりしが、平家西國に落ちし時、賴朝かねて賴盛に通問して疎意なき由を言はせける程に、賴盛一人一門に叛きて、都に留りけり。その後平家未だ亡びずして西海にありし時、賴朝舊恩を謝せん爲に賴盛を鎌倉に招きしが、宗清をも必ず召具せらるべき由を言ひおこされければ、賴盛關東に赴くとて、宗清に「いざ、つれて下らん。」と言ひしに、宗清言ひけるは、「賴朝某に下れと候は、定めて昔のなじみを思ひ出でて、所領、引出物などして、そのかみ扶助せし勞に報ぜんとの事にてあるべく候。今更源氏に諂ひて、その蔭に依り候はんは、西海にある朋友どもの承る所も口惜しくこそ候へ。君はかくて都に安堵しおはしまし候へども、御一門は何れも西海に流落し給ひ、日夜安き御心も

(一)神奈川縣(相模國)足柄下郡石橋村の南。

あるまじく候。此所にて思ひやり奉るもいたはしくこそ候へ。鎌倉に御越し候うて、賴朝某が事を尋ねられ候はば、をりふし勞る事ある由を仰せられて給はり候へ。」とて、鎌倉には行かざりけり。その後西海へ下りけるにや、その終を知らず。伊東祐清は伊東祐親が第二子なり。賴朝伊豆に流謫せられし時、祐親に依りておはせしが、祐親禁衞の役に當りて京師に赴きし間に、快からぬ事ありて、歸りて後これを害せんとするを、祐清悲しみ賴朝を深く愛護し、竊に遁れ去らしむ。その後賴朝兵を起して伊豆より相模に赴きし時、祐親平家の身方として、大庭景親等と石橋山に至りて、賴朝を追ひ襲ひけり。その後賴

石橋山の賴朝(谷口香嶠筆)

勸賞

(一)石川縣（加賀國）江沼郡。壽永二年（一八四三年）源平兩氏この地で戰つた。

(二)國文學者、文學博士。金澤市の人。明治四十三年歿、年四十一。國文學全史平安朝篇、日本繪畫史、國文學史講話等の著がある。

天涯放浪の行脚僧

(三)藤原定家。

朝既に東國を平定し、自ら大兵を率ゐて駿河に至られし時、祐親を生捕りて至りしを、その罪を決するまで、祐親をば祐親が婿三浦義澄に預けられ、祐清を召出して、勸賞を行はれんとありしに、祐清「唯御恩には早く殺され候へ。父囚はれ、その子勸賞せらるゝ法や候。若し我を殺し給はずば、平家に歸すべし。」と言ふに、さればとて我を救ひし者を殺すべき樣なしとて、宥して放ちやりけり。祐清それよりすぐに京師に奔りて平家に屬し、後篠原の合戰に、終に討死を遂げけり。この三人、時代も大方同じく、志節も相似たり。その清風高義、源平の間に求むるに、その類少く覺え侍り。

——駿臺雜話——

三　詩人西行

藤岡作太郎

西行何者ぞ、天涯放浪の行脚僧。その名を一時の名流俊成と齊しうし、鎌倉、室町の世、抑、歌道に於て定家を難ぜん輩は、冥加もあるべからず、罰を蒙るべき事なり。」と言はれし時、稱讚の聲また定家に讓らず。近世に至つて定家の價値いたく墜落したれども、山家集の一書は、尙いかなる歌人の机邊をも去らず、西行の名今に嘖々たるは抑、何の故ぞ。

(一)二卷。西行の家集。

嘖々

西行法師、俗名は佐藤義清、鎭守府將軍藤原秀郷が九世の孫なり。代々武を以て家を立つ。義清また勇敢にして弓術を善くす。和歌に堪能なるは蓋しその天稟なり。鳥羽上皇に仕へて北面の士となり、左兵衞尉に任ぜらる。上皇その才を愛して登庸せんとす。されど義清は榮利を喜ばずして、常に厭離の志あり。その出家の動機に就いては、或は傳へていはく、曾て同族左衞門尉憲康と同行して鳥羽殿より退出し、また明日を期して別る。次の朝參朝せんとて、約に隨ひて憲康を誘へるに、門の邊に人立騷ぎ、內には泣悲しむ聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ぬれば、「殿は昨夜頓死し給へり。」とて、若き妻、老いたる母

北面の士

厭離の志

(二)京都府（山城國）紀伊郡に宮址がある。

の重なり伏して歎くに、義清は惕然(てきぜん)として遁世の念更に堅し。官を辭して許されざれども、「棄恩入無爲(ステテオンニイルムイニ)」は如來の教なりと觀じ、四歳の女が父の歸れるを喜びて取りすがるを、思ひ切りて緣より下に蹴落し、これこそ愛著の絆を斷つ始ぞと、顧もせで家を遁れ出で、嵯峨に至りて剃髪せりと稱す。かくて名を西行また圓位といふ。出家する時保延(二)六年にして、西行歳正に二十三なりきといふ。

西行既に世を遁れて高野に籠り、吉野に隱れ、出でては熊野に參り、伊勢に詣で、鎌倉に下りて右幕(三)下に見參し、進みて奥州に至り、西の方は中國より四國に渡りて大師(四)の靈場を拜み、それより筑紫に

傳西行筆蹟

惕然
(一)清信士度人經の偈句。

愛著の絆
あめそゝくはなたちはなに風すきてやまほとときすくもになくなり
(藤原俊成の詠)

(二)第七十五代崇德天皇の御代、一八〇〇年。
(三)右兵衞佐頼朝。
(四)弘法大師。

桑門

悠々自適

手ぐすねを引く

遊べり。常に謂へらく、「桑門に家なし、抖擻(とそう)して身を終ふべし。」と。一枚の笠、一本の杖、草の枕、苔の茵、東西にさすらひ自然を友とし、悠々自適、興至れば則ち和歌を詠ず。高尾の文覺(一)これを惡み、弟子に告げていはく、「遁世の身ならば一筋に佛道修行の外他事あるべからず。數寄を立てて此所彼所に嘯きありく條、憎き法師なり。いづこにても見あひたらば頭を打割るべし。」と。その後、高尾の法華會に行脚の僧の參り會ひて、花の蔭など眺め歩き、坊に來りて一宿を請ふあり。「誰ぞ。」と問へば、「西行と申す者。」と言ふ。文覺手ぐすねを引き、望のかなひつる體にて、明障子をあけて出づ。暫しまもりて、「年比承り及びたるに、御尋ね悦び入り候。」とて、迎へ入れて饗應に餘念

桑門
悠々自適
(一)鎌倉時代の豪僧。俗名を遠藤盛遠といふ。正治元年(一八五九年)寂、年八十。

文覺

なし。弟子たちはいかなる事の出で來んかと、手に汗を握りたるに、この體たらくにて、西行は無事に歸り去りしかば、「日比の仰に違ひたるは。」と怪しみ問ふ。文覺答へて、「あら、言ひがひなの法師どもや。あれは文覺に打たれんずる者の面樣か。文覺をこそ打たんずる者なれ。」と言へりといふ。

言ひがひなの法師どもや
面樣

西行深く月花を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせん事を思ひて、詠じていはく、

涅槃
幽契違はず

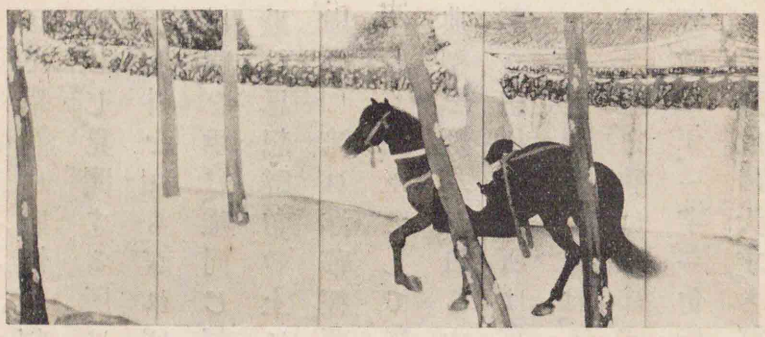
ねがはくは花のもとにて春死なん
そのきさらぎのもちづきのころ

晩年洛東雙林寺の邊に草庵を結びて閑居せるが、幽契違はず、建久元年二月十六日、七十三歳にて入滅せり。

我が國古來詩人多しと雖も、深く自然にあこがれ、山川を無二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へし者、前後僅かに三人。西行、

(一)連歌師。飯尾氏。花の下と號した。紀伊の人。文龜二年(一四六二)歿、年八十二。
私淑

一期を劃す
風月に放浪し雲水に吟嘯す
吟囊を肥す
踢蹐す



大和路の宗祇（井澤蘇水筆）

(一)宗祇、芭蕉これなり。西行これが先達をなし、宗祇は應仁亂離のをりをも厭はず、私淑してその跡を追ひし者、芭蕉は元祿泰平の機に乘じて、また西行、宗祇が行狀を慕ひし者とす。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人。各その道に一期を劃せし三家が、何れもまた風月に放浪し、雲水に吟嘯せし事を思へば、旅行がいかに詩人の吟囊を肥すものなるかを知るべし。

抑、平安時代の貴紳淑女は、賀茂、桂二川の流域數里の間を己が世界とし、海も見ぬ天地に踢蹐し、足畿外に出でず。一生の經過極

新古今集
御鳥羽上皇の時
藤原定家
〃定隆
の
二氏にて作らる

形式を主とし詞花言葉

京洛

粉本

めて單調に、感情を刺衝する物なければ、隨つて思想の發展も、ある事なし。見聞する所は東山の花、西山の紅葉、何時も同じ京洛の風物より外を知らざれば、詠ずる所の歌も變化を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖を承け、唯同じ詞花言葉を飾るのみにて累代繼承し行けば、和歌の思想辭句の上にも自ら典型を生じて、天眞を忘れ、實情を欺き、虛僞に流れ、浮華輕薄徒に形式を飾りて、燦爛たる錦囊その內容は空しく、滔々として風をなせる時、西行獨り蹶起して從來踏襲せる典型を簸却し、自ら山水の間に逍遙して、直接に自然が隱微の聲を聞き、感得する所は萬朶の花と咲けり。平安の末、崇德院の御製が殊に斷腸の響あるは、その悲慘なる實境を詠ぜる事の、世上一般の題詠と選を殊にすればなり。わけて西行が歌ふ所、一も古人の粉本を模倣せず、一字一句皆己が肺腑より出づ。數百年の後尙名聲嘖々として天成の大才と許さるゝも、また宜ならずや。——國文學全史——

簸却
隱微の聲

(一)小說家。明治十九年佐賀縣に生れた。島崎藤村、草光る、白雲飛ぶ、霧の秋、島紀行、吉田絃二郎全集等の小說、多くの外、感想集がある。

(二)西行の歌。一首の意は、一つの身では同時に咲く全國の花を見る事は出來ないから、身をいくつに分けても全國の花の盛をすべて見つくしたいものだ。

祖國　祖先以來住んで來た國。父母の國。自國。

自修文

櫻咲く日本よ　吉田絃二郎

身を分けて見ぬ梢なくつくさばや

よろづの山のはなのさかりを

これ程に花に對して貪るばかりの愛著を感じた詩人が、世界にあるであらうか。

しかし、この花に對する愛著の念は、日本人にならば西行ばかりでなく、殆どすべての人に見出す事が出來るはずだと思ふ。殆ど私たちすべてが、春になれば、見ぬ梢なく花を見つくさうと思ふ。

日本といふ私たちの祖國が、一番はつきり私たちの心に刻みつけられて來るのは、櫻の花が咲く日である。花が咲いて來れば、日本人全體が、世界のどこの詩人よりも花を愛し、花をたゝへる事を知つてゐる。西行の歌はたま〳〵日本人のすべての櫻の花

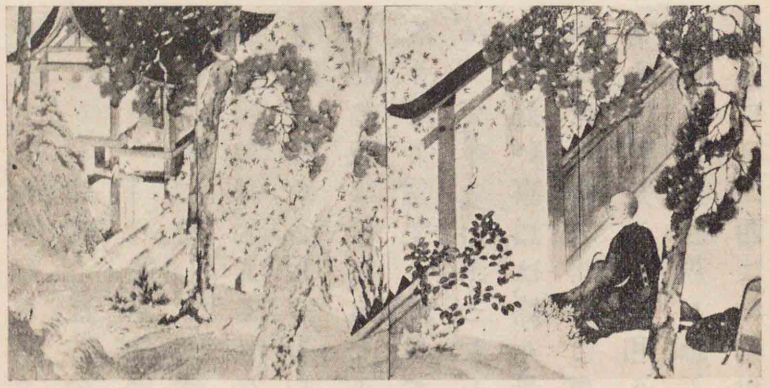
に對する愛著を代言したものに過ぎない。

私は日本に生れた事を有難いと思ふ。殊に花が咲く日にしみじみそれを感ずる。

山の雪が解け始める。もう南の方からは花の便りが來る。三月も半ば過ぎれば、薩摩、日向あたりの山櫻が咲始める。その頃南方を立つて北の方へと日毎旅枕を重ねる人々は、三月の二十四五日頃になれば、北九州の山櫻が綻びてゐるのに出會ふ。中國から畿内、東海、東山と、北へ〳〵と旅を續ければ、短い花の命とは言ふものの、勿來關、平泉まで行くうちには、四十日以上の花を見る事が出來る。全く三月から四月と日本國中が花に包まれてしまふ。潮煙に閉されて、あるかなきかに見える小さい隱岐や對馬の島島までもが、日本である限りは、雲の様な花に包まれてゐる。

西洋では聖地巡禮といふ事が昔からある。(一)チョーサーのカンタベリー物語などを讀むと、今の日本の御彼岸の札所めぐりを思

旅枕　たびれ。
煙潮　海水のしぶき。
聖地　靈場。
(一)Chaucer.　イギリスの詩人。(西紀一三四〇―一四〇〇年)
(二)Canterbury Tales.　イギリス古文學の傑作で、敍事詩である。ロンドンからカンタベリーの聖院に參詣する三十二人の人々が馬上で物語つた小話を集めた體に作られてゐる。カンタベリーはロンドンの東南約一〇〇キロメートルで、イギリスの宗教上の首府である。
札所めぐり　禮拜の功德をつむ爲に佛閣を巡ること。
世捨人　隱遁した人。



西行（矢澤弦月筆）

ひ出すが、もうあゝいふのんきな遍路は、かの地では遠い昔になくなつてしまつたであらう。

日本ではまだ四國めぐり、大和めぐり、どこそこの新札所めぐりといふものが、なか〳〵盛んである。そしてそれは花の盛を中心にして行はれてゐる。札所めぐり、聖地めぐりといふが、實は花をめぐりての旅である。花遍路である。西行にしたところで、實に一生花をめぐつての旅人であつた。花巡禮であつた。彼は秋の山に鹿も聽いた。雪の野も歩いた。彼は寂しい世捨人の様にも思はれる。けれども、彼くらゐ日本の春

を愛し、日本の春を解した詩人はないであらう。

ねがはくは花のもとにて春死なん
そのきさらぎのもちづきのころ

彼は春に對しては貪慾であつた。(一)しぎたつ澤のほとりの秋を見た頃には、恐らく彼は人生無常の相をそのまゝに受容れて、死も恐れなかつたであらう。けれども再び旅に春を見た刹那、吉野の花に包まれた日に、彼の執心は燃えたであらう。彼は二十年も三十年も猶生き續けて行きたいと思つたであらう。湖畔詩人ウォ(二)ーヅウォースであつたかと思ふが、「この附近の風光は實にいゝ。唯一つ惡い事には、餘り景色がいゝ爲に、死ぬ事がいやになる。」といふ意味の事を語つた事がある。西行も恐らく同じ事を感じたであらう。伊賀から大和への途すがら、(三)「春なれや名もなき山の朝霞」と歌つた日、芭蕉も恐らく同じ事を感じたであらう。(四)「菜の花や月は東に日は西に」に、蕪村ならずとも、春の日の日本に生れた幸福

(一)「心なき身にもあはれは知られけりしぎたつ澤の秋の夕暮」(山家集、西行)
相すがた。ありさま。
湖畔詩人　十九世紀の初、イギリスの北部の湖水地方に住んだウォーズウォース、サウジイ、コールリッヂ等の詩人の一派をいふ。
(二)Wordsworth.　イギリスの詩人。(西紀一七七〇年―一八五〇年)
(三)芭蕉の句。
(四)蕪村の句。

を感じないではゐられないであらう。

西行も芭蕉も世捨人である。しかし、印度あたりの世捨人とはまるで違つてゐる。どこまでも世を捨てきれぬ人たちである。彼等が世を捨てたといふのは、餘りに自然を愛したが故である。心行くまで自然に浸されたい爲に、暫く世の煩はしさを避けたばかりである。自然を味はふといふ點では、誰をも彼をも受容れてゐる。日本國中の人々を一緒に誘ひ出して、自然を味はつてゐる。

日本人はこせ〳〵してゐるとよく非難される。しかし、花の盛の日本人を見ると、あながちさうでもない。花に惠まれた日本の自然が、春の日になれば、日本人の心を特に淨化してくれるのか知らぬが、ともかく花の盛の日本人は、愛すべき國民である。佛詣や神詣にかこつけて四國中をめぐり、大和をめぐつて、花を見て歩く事の出來る子供らしさを失はぬ民族である。西行といひ、芭蕉といひ、一生のなまけ者であつた。日本の秋を、日本の春を殘る

淨化する　きよくする。

萬葉時代　萬葉集の時代の意。萬葉集は我が國最古の歌集で、仁德天皇から淳仁天皇の時までの歌を集めたもの。

分別くさい人　わきまへを多分にもつた人。

(一)榎本其角。芭蕉の門人中の第一人者。寶永四年(二三六七年)歿、年四十七。

(二)服部嵐雪。芭蕉の門人。寶永四年(二三六七年)歿、年五十四。

隈なく見つくしたいが爲に、家業を捨てて歩きまはつた大きな子供である。

日本人程詩を作る國民は他にないであらうと誰でもいふ。私もさう信じてゐる。萬葉時代から日本人は、花下の行樂を無性に樂しむ事を知つてゐた。日本人は愛すべきなまけ者であつた。その中でも一番大きなまけ者が、西行と芭蕉とであつた。それから後の世の歌人や俳人たちには、分別くさい人たちが多過ぎてしまつた。其角(一)にしろ、嵐雪(二)にしろ、蕪村にしろ、分別があり過ぎる。この事は、歌人の場合でもやはり同じ事だが。

それはともかくとして、日本人がこれ程多く詩を作るといふ事は、やはり惠まれた日本の自然からであると思ふ。日本に櫻が咲く間は、日本人は惠まれてゐると思ふ。日本人は詩を作る事を忘れてはならない。

わけもなく懷かしい櫻。わけもなく暖い感じの櫻。わけもなく

あてやか　上品。

(一)「さまざまの事思ひ出す櫻かな」(芭蕉)

(二)西行の「世を捨てて身はなきものと思へども雪の降る日は寒くこそあれ」の歌に芭蕉が讃して「花の咲く日は浮かれこそすれ」と附けた。

可憐な櫻。わけもなくあてやかな櫻。わけもなく哀な櫻。わけもなく「さまざまの事思ひ出」させる櫻(一)。誰の爲に咲いてくれるのか、誰の爲に散つて行くのか、待たれる日のみ長くて、散る事の餘りに早い櫻。

無常の實相を餘りに美しくも、餘りに傷ましくも私たちの心に刻みつけてくれる櫻。日本中の山も、原も、町も、今日は花の霞に包まれてしまつた。私は惠まれた日本を思ふ。

西行も、芭蕉も、「花の咲く」(二)今は「浮れこそ」したであらう。

今日は日本人に取つて一番明るい幸福の日である。と同時に、一番もの哀な日である。

四　櫻あらそひ

アド「これはこのあたりの者で御座る。この頃はいづ方も花の盛ぢやと申す程に、花見に參りたう存ずれども、暇がなさに參る事もえ

いたさぬ。もはや暇になつて御座る程に、今日は花見に参らうと存ずる。先づ太郎冠者を呼出し、申しつけう。やい〳〵、太郎冠者あるか。

シテ「はあ。アド「ゐたか。シテ「お前に居ります。

アド「汝を呼出す事、別の事ではない。この頃は方々の花盛ぢやといへども、暇がなさに、花見に行く事もならなんだ。もはや暇になつた程に、花見にいでうと思ふが、何とあらうぞ。シテ「これは珍しい事を仰せられます。この頃は櫻の盛ぢやと申す程に、櫻を御覽ぜられうとあれば、尤もで御座るが、珍しからぬはなを御覽ぜられて、何にさせらるゝ。アド「いや、おのれは何事をいふ。櫻も花も同じ事ぢや。シテ「これは賴うだ人とも覺えぬ事を仰せらるゝ。さ樣に仰せられたら賴うだ人

ば、人中で恥をかゝせられう、身どもは苦しう御座らぬが。アド「して、汝がその樣に言ふは子細があるか。シテ「なか〳〵、子細こそ御座れ。はなが見させられたくば、私がはなを見させられ。餘所へ御座るまでも御座らぬ。言語道斷

アド「いや、おのれは言語道斷の事を言ひをる。汝が面なは鼻といふ。花といふは別ぢや。シテ「さ樣では御座らぬ。歌などにも櫻とは詠まれたれども、花とは詠まれませぬ。でもない事

アド「なか〳〵でもない事を言ひをる。その歌を詠うで聞かせい。シテ「詠うで聞かせたらば、肝を潰させられう。アド「急いで詠め。シテ「心得ました。

櫻ちる木の下かぜは寒からで
そらに知られぬ雪ぞ降りける

これはなんと。アド「こちにも花といふ歌がある。シテ「さらば詠うで聞かせられい。

行きくれて木の下かげを宿とせば
はなや今宵のあるじならまし

シテ「この方にもまだ御座る。

やま櫻わが見にくれば春がすみ

言語道斷
でもない事
(一)紀貫之の作。拾遺集卷一春の部に出てゐる。
(二)平忠度の作。平家物語卷九に出てゐる。
(三)よみ人知らず。古今集卷一春の部に出てゐる。

峰にも尾にもたちかくしつゝ

アド「それならこちにもある。

花の色はうつりにけりないたづらに
わが身世にふるながめせしまに

シテ「それならばこちには謠に御座る。アド「うたへ、聽かう。シテ「櫻かざしの袖ふれて。アド「一段の謠うたふ。いたし樣が御座る。やい、太郎冠者。謠「花見車くるゝより、月の花よ待たうよ。月の花よ待たうよ。

シテ「はあ、これでつまりました。アド「總別何も知り居らいで、むざとした事を言ひ居つて、某と競合ひをる。あつちへ失せい。シテ「はあ。

アド「えい。シテ「はあ。

—續狂言記—

島崎藤村

(一)小野小町の作。古今集卷二春の部に出てゐる。

(二)謠曲「小鹽」の一節。

總別　むざとした事

(三)詩人、小說家。名は春樹。明治五年長野縣に生れた。新生、飯倉だより、藤村詩集、春、嵐、藤村全集等の著がある。

五　晩春の別離

時は暮れゆく春よりぞ
また短きはなかるらん。
恨は友のわかれより
さらに長きはなかるらん。

君をおくりて花ちかき
高樓までも來て見れば、
みどりにまよふ鶯は
霞むなしく鳴きかへり、
しろき光は佐保姫の
春の車駕を照すかな。

佐保姫の春の車駕

これより君は行く雲と
ともに都を立ちいでて、

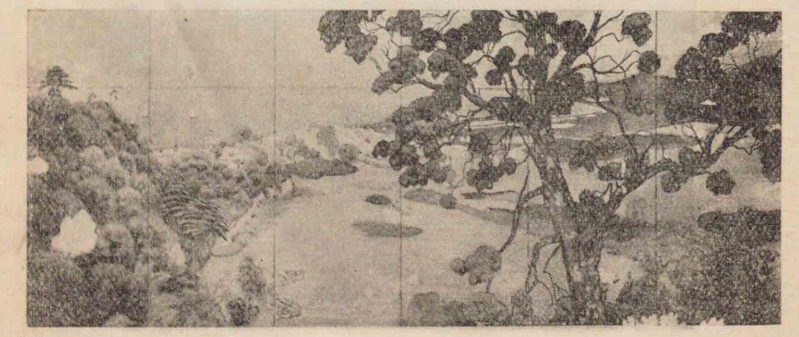
おもへば琵琶の湖の
岸の光にまよふとき、
ひがし膽吹(一)の山高く、
西には比叡、比良(二)の峰、
日は行きかよふ山々の
ふかきながめを伏仰ぎ、
いかにすぐれし想をか、
沈める波にたゝふらん。
ながれはむなし法皇(三)の
夢はるかなる賀茂の水、
水にうつろふ山城の
みやびの都ゆく春の

(一)伊吹とも書く。近江と美濃との境に聳えてゐる。海拔一三〇三メートル。
(二)近江の西部、比叡の北方に聳えてゐる。海拔八五〇メートル。近江八景の一。
(三)白河法皇。

湖畔の殘春（池田遙村筆）

かすめる姿見つくして、
畿内にせまる伊賀伊勢の
鈴鹿の山の波とほく
海に落つるを望む時、
いかによろづの恨をば、
空行く鷲に窮むらん。

春さり行かば、青によし
奈良の都に尋ね入り、
としつき君がこひしたふ
御堂のうちに遊ぶ時、
ふるき藝術(たくみ)の花の香の
伽藍の壁にのこりなば、

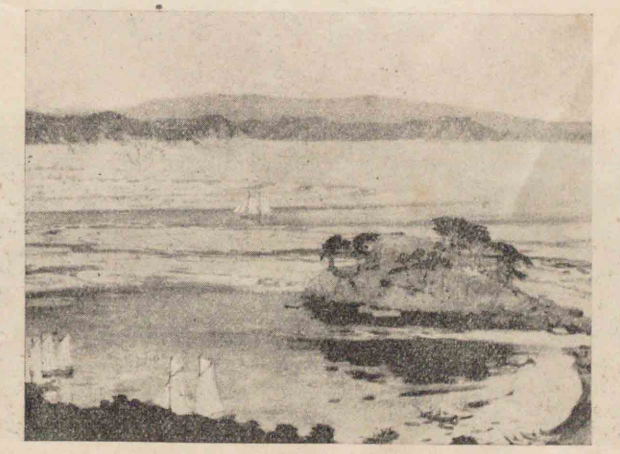


湖畔の殘春（池田遙村筆）

いかに韻を身にしめて、
深き思にしづむらん。

さては秋津の島が根の
南のつばさ紀の國を、
めぐりて進む黒潮の、
(一)鳴門に落ちて行く所、
あまぎは遠く白き日の
光をもらす雲裂けて、
目にはるかなる遠海の
波のをどるを望む時、
いかに胸打つ音たかく、
君が血汐のさわぐらん。

(一)阿波(德島縣)の東北端孫崎と淡路(兵庫縣)の門崎との間にあつて、朝夕干滿時の潮流の激しさは世界に類のない壯觀。



阿波の鳴門(中川八郎筆)

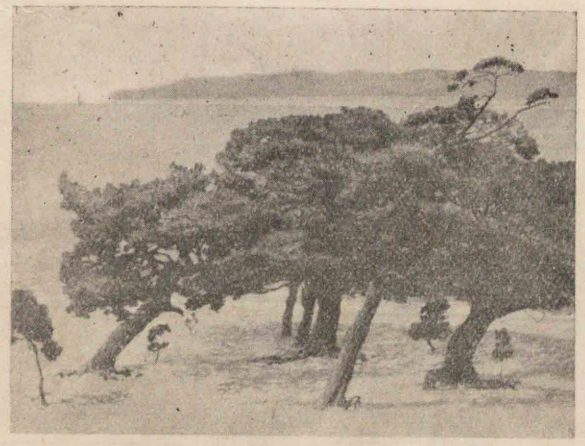
または名に負ふ歌枕、
波に千とせの色映る
(一)明石の浦の朝ぼらけ、
松よろづよの音にひゞく
(二)舞子の濱のゆふまぐれ、
もしそれ海の雲落ちて、
淡路の島の影くらく、
さ霧のうちに鳴きかよふ
千鳥の聲を聞く時は、
いかに浦邊にさすらひて、
遠き昔をしのぶらん。

(一)兵庫縣(播磨國)明石市の南海岸。

(二)兵庫縣(播磨國)明石郡垂水の海濱。須磨と明石との中間。

明石

げに君がため山々は
雲を停めん、浦々は
磯にながるゝ白波を
あげんとすらん。よしさらば、
旅路遙かに野邊行かば
野邊のひめごと、森行かば
森のひめごと探りもて、
高きに登り、あめつちの
もなかに遊び、大川の
ながれをきはめ、山々の
神をもよばひ、谷々の
鬼をもおこし、歌人の
魂をも遠く返しつゝ、



舞子の濱（鹿子木孟郎筆）

朽ちせぬ琴

清しき聲をうちあげて、
朽ちせぬ琴をかきならせ。

さらば名殘は盡きずとも、
たもとを分つ夕まぐれ、
見よ、影ふかき欄干に、
けむりをふくむ藤の花。
北行く雁はおほ空の
霞に沈み鳴きかへり、
彩なす雲も愁へつゝ、
君を送るに似たりけり。

あゝ、いつかまた相逢うて

もとの契をあたゝめん。
梅も櫻も散りはてて、
すでに柳はふかみどり、
人はあかねど、行く春を
いつまでこゝにとゞむべき。
われに惜しむな、家づとの
一枝の筆の花の色香を。

—藤村詩集—

六　奥の細道　その一

松尾芭蕉(一)

月日は百代の過客にして、行交ふ年もまた旅人なり。船の上に生涯を浮べ、馬の口とらへて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を棲所とす。古人も多く旅に死せるあり。余も何れの年よりか片雲の風に

(一)江戸時代の俳人。俳聖と言はれる。伊賀の人。元禄七年(一六九四)歿、年五十一。奥の細道、更科紀行、鹿島紀行等の著の外、句集がある。

(二)「夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客云々。」(李白、春夜宴桃李園序)

さそはれて、漂泊の思やまず。海濱にさすらへ、去(一)年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣を拂ひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關越えんと、そゞろ神の物につきて心を狂はせ、道祖神の招にあひて、取る物手につかず。股引の破を綴り、笠の緒つけかへて、三里に灸すうるより松島(二)の月先づ心にかゝりて、住める方は人に讓り、杉風が別墅に移る。

草の戸もすみかはる代ぞ雛の家

彌生も末の七日、曙の空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の峰かすかに見えて、上野谷(三)中の花の梢、また何時かはと心細し。睦ましき限りは宵より集ひて、船に乘りて送る。千住(四)といふ所にて船をあがれば、前途三千里の思胸に塞がりて、幻の巷に離別の涙をそゝぐ。

行く春や鳥啼き魚の目は涙

(一)元禄元年。(一六八八年)

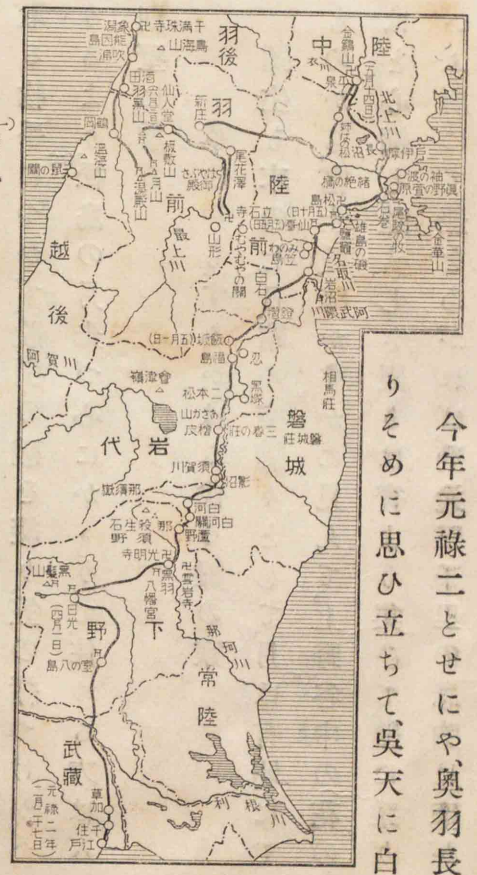
(二)鯉屋杉風。杉山氏。芭蕉の門人。江戸の人。享保十七年(一七三二)歿、年八十六。別墅は江戸深川六間堀にあつた。

(三)今の上野公園から西北に續く地。

(四)東京府南足立郡。奥州街道最初の宿驛。

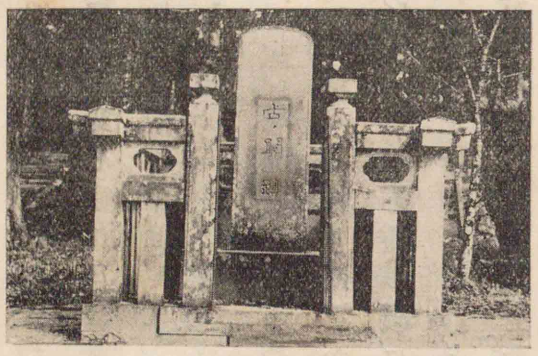
これを矢立の初として、行く道尙進まず。人々は途中に立並びて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。

今年元祿二とせにや、奥羽長途の行脚唯かりそめに思ひ立ちて、吳天に白髮の恨を重ぬと雖も、耳に觸れて未だ目に見ぬ境、若し生きて還らばと、定めなき賴の末をかけ、その日漸く草加(一)といふ宿にたどり著きにけり。瘦骨の肩にかゝれる物先づ身を苦しむ。唯身すがらにといでたち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、浴衣、雨具、墨、筆のたぐひ、あるはさり難き餞などしたるは、流石



(一)埼玉縣北足立郡。奥州街道の宿驛。

にうちすて難くて、路次の煩となれるこそわりなけれ。心もとなき日數重なるまゝに、白河の關にかゝりて旅心定まりぬ。(一)いかで都へと便り求めしも理なり。中にもこの關は風騷の人、心を留む。秋風を耳に殘し、紅葉を面影にして、青葉の梢猶哀なり。卯の花の白妙に、茨の花の咲添ひて、雪にも越ゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣裳を改めし事など、清輔(二)の筆にも留め置かれしとぞ。



白河の關址

卯の花をかざしに關の晴著かな　曾良

とかくして越えゆくまゝに、阿武隈川を渡る。左に會津嶺(三)高く、右に磐城、相馬、三春(四)の莊、常陸、下野の地をさかひて、山連なる影沼(五)といい

(一)「たよりあらばいかで都へつげやらんけふ白河の關は越えぬと」(拾遺集、平兼盛)

(二)藤原清輔。第七十八代二條天皇の御代の歌人。竹田大夫國行といふ者この關を過ぐるとて服裝を特に改めた事、清輔の著「袋草子」に見えてゐる。

(三)磐梯山のこと。

(四)今福島縣(磐城國)田村郡の地方で、三春町が中心になつてゐる。

(五)福島縣(岩代國)岩瀨郡。子石と須賀川との間にある新田。

ふ所を行くに、今日は空曇りてもの影映らず。須賀川の驛に等躬といふ者を訪ねて、四五日とゞめらる。先づ白河の關いかに越えつるやと問はる。長途の苦しみ、身心疲れ、且は風景に魂奪はれ、懷舊に腸を斷つて、はか〴〵しう思ひめぐらさず。

風流のはじめや奥の田植歌

鹽釜の浦より船をかりて松島に渡る。その間二里餘、雄島の磯に著く。

抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭西湖に恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮をたゝふ。島々の數を盡して、峙つものは天を指し、伏すものは波に匍匐ふ。あるは二重に重なり、三

松島

(一)同郡須賀川町。白河の東北二六キロメートル。
(二)姓は相良、名は伊左衛門。芭蕉の門人。寶永二年(一三六五年)歿、年七十八。
(三)支那湖南省の北部にある大湖。
(四)支那浙江省にある。洞庭湖と共に風光の美を以て稱せられる。
(五)浙江省にある。一名錢塘江。海嘯の奇を以て知られてゐる。

重に疊みて、左に別れ、右に連なる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の綠濃やかに、枝葉汐風に吹きたわめられて、屈曲自ら矯めたるが如し。千早振神代の昔、大山祇のなせる業にや、造化の天工、何れの人か筆を揮ひ、詞を盡さん。

雄島が磯は地續きて、海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。はた松の木蔭に世を厭ふ人も稀々見えて、落穗、松毬などうち煙りたる草の庵閑かに住みなし、いかなる人とは知られずながら、先づ懷かしく立寄る程に、月海に映りて、晝の眺また改りぬ。江上に歸りて宿を求め、風雲の中に旅寢するこそ、怪しきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良

余は口を閉ぢて、眠らんとしていねられず。舊庵を別るゝ時、素堂松島の詩あり。原安適、松が浦島の和歌を贈らる。袋を解いて今宵の

(一)山を掌る神。
(二)禪僧。土佐の人。萬治二年(一六五九年)寂、年七十八。
(三)姓は山口、名は信章。甲斐の人。俳諧、詩に巧みであつた。芭蕉の友。享保元年(一七三六年)歿、年七十五。
(四)醫者。芭蕉の友人。江戸の人。

風雲の中に旅寢す

友とす。且杉風、濁子(一)が發句あり。

(一)姓は中川。美濃の人。芭蕉の門人。

四三頁

七　奥の細道　その二

十二日(一)、平泉へと志す。聞傳へたる姉歯の松、緒絶の橋など人跡稀に、雉兎芻蕘の行交ふ路そこともわかず。終に路ふみたがへて、石の卷といふ湊に出づ。黄金花咲く。」と詠みて奉りたる金華山海上に見わたされ、數百の廻船入江に集ひ、人家地を爭ひて、かまどの煙立續きたり。思ひかけずかゝる所にも來れるかなと、宿借らんとすれど、更に宿貸す人なし。漸くまどしき小家に一夜をあかして、あくれば また知らぬ路迷ひ行く。袖の渡、尾駮の牧、眞野の萱原などよそめに見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼に沿うて、戸伊摩といふ所に一宿して、平泉に至る。

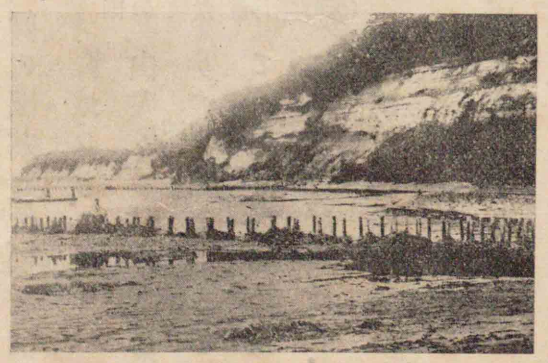
三代の榮耀一睡のうちにして、大門の跡は一里此方にあり。秀衡

(二)元祿二年五月。
(三)雉兎芻蕘　(三)今宮城縣牡鹿郡石卷町。
(四)「すめろぎの御代榮えんとあづまなるみちのく山にこがれ花さく」(萬葉集、大伴家持)
(五)同縣桃生郡橋浦村。
(六)(七)牡鹿郡稻井村の字。
(八)同縣登米郡新田村新田沼。
(九)同郡登米町。
(一〇)藤原清衡、基衡、秀衡。
(一一)平泉館址。奥の御館。

が跡は田野になりて、金雞山のみ形をのこす。先づ高館に上れば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は泉が城を遶りて、高館の下にて大河に落入る。泰衡等が舊跡は衣が關を隔てて南部口をさし堅め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつてこの城に籠り、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたり。」と、笠うち敷きて、時の移るまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散失せて珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虛の叢となるべきを、四面新たに圍みて、いらかを



衣川遺址

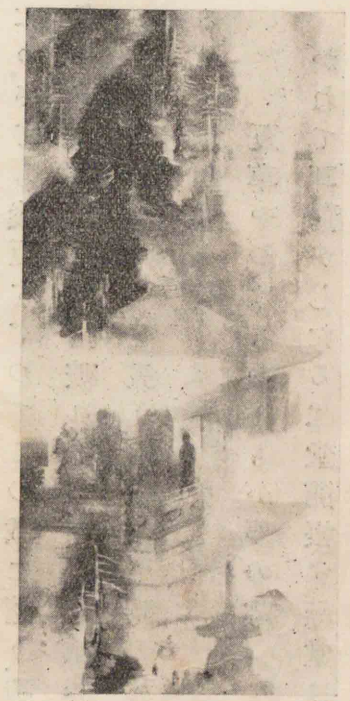
(一)秀衡が作つた平泉鎭護の山。富士山に擬し、雌雄の金雞を山上に埋めた。
(二)衣川館。義經の居館。
(三)奥州北部の稱。盛岡市附近から北部にかけていふ。南部氏が奥州に封ぜられてから起つた名である。
(四)泉三郎忠衡の居館。功名一時の叢となる
(五)「國破山河在、城春草木深。」(春望詩、杜甫)

(蘆)

覆ひて風雨を凌ぎ、暫く千歳の記念とはなれり。

五月雨のふりのこしてや光堂

山形領に立石寺（りふしやくじ）[一]といふ山寺あり。慈覺[二]大師の開基にて、殊に清閑の地なり。一見すべき由人々の勸むるによりて尾花澤[三]よりとつて返す。その間七里許なり。日未だ暮れず。麓の坊に宿借り置きて、



雨の光堂（蔦谷龍岬筆）

山上の堂に登る。岩に巖を重ねて山とし、松柏年舊り、土石老いて苔滑かに、岩上の院々扉を閉ぢて物音聞えず。岸をめぐり岩をはうて佛閣を拜し、佳景寂寞として、心澄行くのみ覺ゆ。

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

(一)今山形縣東村山郡山寺村にある。俗に山寺ともいふ。天台宗。
(二)天台宗延暦寺第二世の座主。下野國の人。貞觀六年（一五二四年）寂、年七十一。
(三)同縣北村山郡尾花澤町。

最上川はみちのくより出でて[一]山形を水上とす。[二]ごてん、[三]はやぶさなどいふ恐しき難所あり。[四]板敷山の北を流れて、はては[五]酒田の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に船をおろす。これに稲積みたるをやいな船といふならし。白絲の瀧は青葉のひま〳〵に落ちて、[六]仙人堂岸に臨みて立つ。水漲りて船危し。

五月雨を集めて早し最上川

江山水陸の風光數を盡して、今象潟[七]に方寸を責む。酒田の湊より東北の方、山を越え、磯を傳ひ、いさごを踏みて、その間十里。日影やゝ傾く頃、汐風眞砂を吹上げ、雨朦朧として鳥海の山隱る。闇中に摸索して雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色また賴もしと、あまのとまの屋に膝を容れて、雨の晴るゝを待つ。

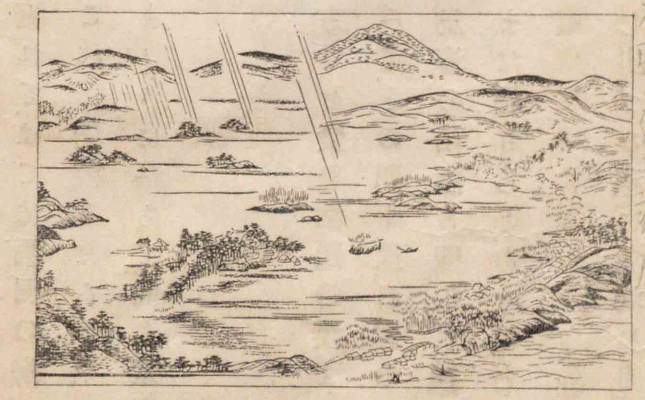
その朝、天よく晴れて、朝日花やかにさし出づる程に、象潟に舟を浮ぶ。先づ能因[八]島に舟を寄せて、三年幽居の跡をとぶらひ、向ふの岸

(一)今の山形市の邊を指したのであらう。
(二)碁點。今山形縣北村山郡西郷村の西。
(三)隼瀬。同郡大高根村の南。
(四)同縣最上郡と東田川郡との境。海拔六・三〇メートル。
(五)今山形縣飽海郡酒田町。
(六)義經の臣常陸坊海存を祀る所といふ。
(七)秋田縣由利郡。鳥海山の西北麓。その海岸はその後文化元年（二四六年）鳥海山の四年の噴火によつて埋沒した。
(八)能因法師が閑居の跡と言傳へる。

にあがれば、花の上漕ぐと詠まれし櫻の老木、西行法師の記念をのこす。寺を千滿珠寺といふ。この寺の方丈に坐して簾を捲けば、風景一眼のうちに盡きて、南に鳥海天を支へ、その影映りて江にあり。西はむや〳〵の關路を限り、東に堤を築いて、秋田に通ふ道遙かに、海北に構へて、浪うち入るゝ所を汐越といふ。江の縱横一里許、面影松島に遙ひてまた異なり。松島は笑ふが如く、象潟は恨むが如し。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂を惱ますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

酒田のなごり日を重ねて、北陸道の雲に望み、遙々の思胸をいた



象　潟（芭蕉翁繪詞傳所載）

（一）「きさかたの櫻は波にうづもれて花の上こぐあまのつり舟」（西行法師）

（二）今宮城縣柴田郡笹谷峠の附近、また由利郡小砂川から飽海郡吹浦へ越える所。こは後者。

（三）今の秋田市。

ましめて、加賀の府まで百三十里と聞く。鼠の關を越ゆれば、越後の地に歩行を改めて、越中の國いちぶりの關に至る。この間九日、暑濕の勞に神を惱まし、病起りて事を記さず。

荒海や佐渡に横たふ天の川

八　旅と宿驛

鳥野幸次

富士、燕の超特急で東海道六百キロメートルの道を八時間で走らせ、鳥より疾い飛行機で自由に天空を飛翔する如きは、古昔と言はず、私たちが幼時にさへ夢想だもしなかつた事であるが、それと同時に、長汀曲浦の旅の道に、馬を馳らせては雞聲を逐ひ、山館野亭の夜の宿に、日を重ねては吟腸を絞る往古の旅がいかなるものであつたかも、また今の人にはちよつと想像のつかぬ事であらう。

いづくにか我は宿らん高島の

（一）山形縣と新潟縣との境。

（二）市振。越後國に屬し、境川を隔てて越中國に對する。

（三）歌人、國文學者。御歌所寄人、國學院大學教授。明治六年福井市に生れた。四季の趣味の外、國文學に關する著がある。

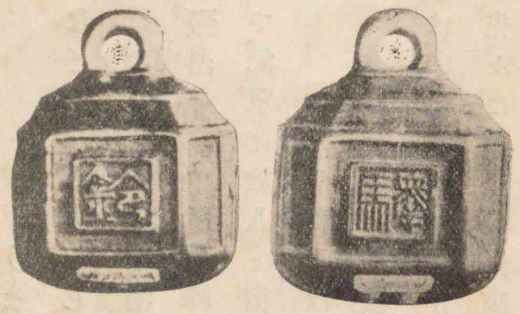
長汀曲浦
吟腸を絞る

（四）萬葉集卷三に見える、高市黑人の歌。

勝野の原にこの日くれなば
大和こひいの寢らえぬに心なく(一)
この洲の崎にたづ鳴くべしや
時には、旅情と鄕愁とで遣瀨なさの極みに立つ事もあらうが、
伊勢の海の沖つ白波花にもが(二)
つゝみて妹が家づとにせん
をぐろ崎みつの小島の人ならば(三)
都のつとにいざといはま
の如き大自然が到る所に展開して、旅人の心を極度に引きつける。
雞聲茅店月、人跡板橋霜(四)
この朝立のすがくしさを味はふ旅人はまた、
歌知らぬ旅人はなし春の風(五)
で、長閑な春風の前には、悉く歌人となつて街道を練る。この快い美

(一)萬葉集卷一に見える、忍坂部乙麿の歌。
(二)萬葉集卷三に見える、安貴王の歌。
(三)古今集卷二十に見える。東歌。
(四)唐代の詩人、溫庭筠の商山早起の詩の句。
(五)江戸時代の俳人、大島蓼太の句。

しい印象は、何時までも詩篇となり、繪卷となつて、その人々の腦底にとゞまる。其所には旅の苦しみなどあつたものではない。これを思ふ時、昔の旅の懷かしさに、せめて五十三次だけでも歩いて見たいといふ氣になるのが常で、もとはよく私たち同人間の話題にも上つたものである。



驛路の鈴

所で、この旅行に最も重要な關係を有するものは宿舍である。令(一)の制度では、三十里に一驛を置く事になつて居り、尙地形の便否によつて、この里程の伸縮はあつたにしても、大體は動かぬものであつた樣だ。そして驛には驛長があり、驛子があり、驛馬を具備して官使の乘用に充てる。その使の驗(しるし)に賜はつて携へるのが、いはゆる驛路の鈴で、

(一)第四十二代文武天皇の大寶元年(一三六一年)に發布された大寶令。

(一)唐代の詩人、杜荀鶴の「秋夜宿臨江驛」の詩の句、ここの二句は和漢朗詠集にも見える。

(二)堀川百首下、關の題で詠んだ大江匡房の歌。

(三)萬葉集卷一に見える。

(四)紀伊國（和歌山縣）の牟婁郡。今の西牟婁郡湯崎溫泉であらう。

(五)一卷。作者菅原孝標の女の自敍傳ともいふべき日記で、十三歳より五十歳までの生活が記されてゐる。

漁舟火影寒燒波。(一)　驛路鈴聲夜過山。

逢坂の關の關守いでて見よ(二)
うまやづたひに鈴聞ゆなり

などでその物々しさが窺はれる。

この官使の宿泊する所は驛家であり、普通の旅人もやはりこの聚落をなす所の驛に宿舍を求めたものであらう。しかし、これだけで、簡單に旅人と宿舍との關係は語り盡きるものではない。

吾が背子はかりほつくらすかやなくば(三)

小松がしたの草を刈らさね

は、中皇女命が紀伊の溫泉にいでました時の御歌で、その御旅行の先々に假屋の出來た樣が窺はれる。外にもこの類の歌は見えるが、これは驛制の完備しない上代のみの事でもなく、また王侯貴人の上のみにも限らない。更科日記の作者が、初瀨詣をする時には、往路

(一)今の京都府（山城國）綴喜郡多賀村附近の地藏池がそれらしい。

(二)奈良の北方の坂。

の一夜を贄野の池のあたりにあかした。その宿はいと怪しげなげすの小家であつたが、主人は、氣の知れぬ人を泊めて、釜ばしぬかれてはと、寢ずの番で一行を見守つたかと思へば、歸途に泊つた奈良坂のこなたの、これもいみじげな小家は、前と反對に、盜人の家であつたといふ。さてまた次の度の參詣には、類廣うて小家などには宿泊も出來ぬので、野中にかりそめの宿を作つて作者を据ゑ、從者たちは野宿をしたので、

草の上に行縢などを打敷きて、上にむしろを敷きて、いとはかなくて夜をあかす。頭もしとゞに露おく。曉方の月いといみじく澄みわたりて、よに知らずをかし。

と、いかにも面白さうに書いてはゐるが、當座の難儀は容易ならぬ事であつたらう。これは寧ろ驛制の廢れた平安末の事で、受領階級の子女たちの近畿地方に於ける旅行の種々相を、最もよく知得る

と共に、廣く他を類推する事も出來、旅の冠辭に「草枕」と措いた上代人の思想の、どこまでも續いた事が知られるのである。

また尙、古昔の旅行に伴なふ大きな不便と恐怖とは、糧食の携帶であり、盜賊の横行であつた。伊勢物語に「皆人かれいひの上に涙落してほとびにけり。」と書いた「かれいひ」は、乾飯であり、糒（ほしひ）である。そして旅に糒を携へるのは、業平東下りの昔に限つた事ではない。柳莽（りうあん）[一]雜筆に據れば、

慶長頃の旅人、糒二合五勺を一日に充て、十日路を行くに二升五合をもたらし、驛舍に著きて湯をわかし、糒を食ひて寢るまでなりし。されば湯の木の代四錢五錢を拂ひ、往來せしとなり。

と見え、これが宿に木錢といひ木賃といふ事の出所である。

盜賊に緣のある話は前にも書いたが、これは直ちに生命にも關する問題であるから、豫め出來るだけの防備をしておくのが、旅人の常であつた。萬葉集に見える間人宿禰大浦の

天の原ふりさけ見れば白眞弓（一）
はりてかけたり夜路はよけん

の歌が、「白眞弓を張りて天に懸けつれば、山賊などの恐なくして、今行く夜路はあしからじとなるべし。」と言つた契沖說の當否は暫く別問題として、旅人が弓矢で護られた事は、源氏物語の玉葛（三）が初瀨參詣をする時に、その賴もし人なる豐後介が、弓矢持つた人を二人召具した事でも分り、更科日記に、

紫生ふと聞く野も、蘆荻のみ高く生ひて、馬に乘りて弓もたる末見えぬまで、高く生茂りて、中を分行くに、竹芝（四）といふ寺あり。

と書いてあるのは、長途をかくる國司一族の上洛であるから、その行粧の嚴かな樣も目に見える樣である。

その物の本質の上から國訓に「うまや」と訓まれた驛は、何時しか

(一) 栗原信充の著。四卷。考證を主とした雜記である。栗原信充は幕臣で考證家。上野の人。明治三年歿、年七十七。

(一) 卷三に見える。
(二) 萬葉集代匠記卷三。
(三) 源氏物語、玉葛の卷に見える。賴もし人
(四) 今の東京市芝區三田臺町にある濟海寺がその跡といふ。

旅の朝（長瀨翠塘筆）

「やどり」の義のある宿とも稱せられ、續けて宿驛ともいふ樣になつた。「やどり」をも兼ねた上代の「うまや」は、だん〳〵「うまや」の實を失つて、「やどり」を主とするに至つた。茲に名稱の變化が生ずる。けれども旅行に附物の人足や馬の次ぎかへが、この宿より外には、求めらるべくもない。其所に宿次の語が生れ、略しては次とも言はれた。そしてこの宿なり次なりが、形は變つても、永久にまた「うまや」の實を傳へる事となつた。

徳川の太平三百年、參勤交代の大小諸侯が、金紋先箱や鳥毛の槍を立てて

櫛の齒を挽く如し

隔世の感

水杯

陰膳

（一）十返舍一九。本名は重田貞一。江戸時代の戲作者。駿府の人。天保二年（一八三一年）歿、年七十七。

（二）歌川廣重。安藤氏。江戸時代の浮世繪師で風景畫に優れてゐた。その東海道五十三次は殊に名高い。安政五年（一八五八年）歿、年六十。

旅の朝（長瀨翠塘筆）

の上り下りが、いかに美しいものであつたかは、想像以上であり、士庶人の來往もまた絡驛として、櫛の齒を挽く如くであつたらう。隨つて驛路の整頓と、宿舍の完備と、前代に比しては、殆ど隔世の感があつたらう。そしてこの時代に於ける驛路なり宿舍なりの最も代表的なのが、東海道の五十三次で、その面影は、一九の膝栗毛や廣重の繪で窺知する事が出來る。けれども上代以來旅に附隨した不便と脅威とが、これで全然なくなつたわけではないので、行く者は水杯をして別れ、殘る者は陰膳

を据ゑて、その平安を祈つたなども、維新前までは殘存した風俗である。しかしながら、世の開化に趣くと共に、交通の整備と迅速とは人の豫想を超越して、驚くばかり進歩した。そして上代以來の樣々な旅の風俗、習慣などは、今は懷かしい昔話として殘るのみである。

九　北京から

田山花袋(一)

唐(二)から今に至る間には、支那にも色々な變遷があつたであらう。それはすぐれた歷史家でなければ、獨斷なしに言ふ事は出來ない程、複雜したものであつたであらう。けれども、しかも日本が朝鮮を中間に置いて、全くそのあらゆる物を模倣したといふ事は、輪郭的に朧氣には分つた。私は昔あつて今なくなつた日本の物を、其所にも此所にも發見する事が出來た。古い物語の中に書かれてある我が宮殿の樣や、京都の町の工合や、城外の市場の樣や、ばねのない荷

(一)小說家。名は錄彌、群馬縣の人。昭和五年歿、年六十。田舍敎師、殘雪、源義朝、花袋全集等の外、多くの小說、紀行、隨筆の著がある。

(二)隋を滅して高祖李淵の建てた國で、哀帝に至るまで二十世、二百九十年で梁に滅された。

車や、さういふ物は皆支那から移されて來たので、例の牛車や檳榔毛の車も、雕車や轎車の模倣であるといふ事が、ひとりでに分つて來た。

それは規模の大小はあつたであらう。結構の相違もあつたであらう。また、とても北京の宮殿の雄大と佳麗とは望む事は出來なかつたであらうけれども、今殘つてゐる京都の皇居と、それに連なつてゐる市街との壯觀は、その時分の樣を私に想像させるに十分であつた。私は門から門へ、宮殿から宮殿へと歩いて行きつゝ、絕えず私たちの平安時代を頭に浮べずにはゐられなかつた。私は其所に藤原道隆や道長がゐる樣な氣がした。和泉式部(一)や紫式部がゐる樣な氣がした。殿上人が笏を持つて威儀を正して、束帶を著て、靜かに天子の前に進んで行つてゐる樣な氣がした。と同時に、その時代に於て、日本がいかに支那にその文明を開發されたかを思はずには

(一)平安時代の女流歌人。越前守大江雅致の女。

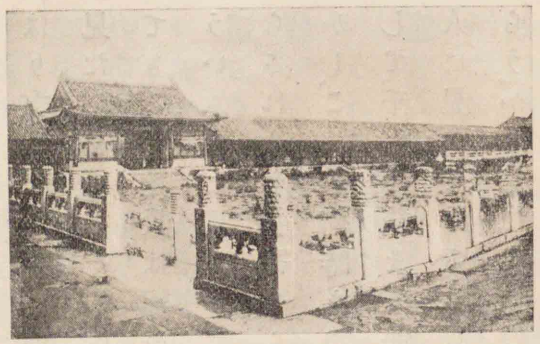
ゐられなかつた。少くとも當時の支那は、日本に取つて今のヨーロッパであつたに相違なかつた。

續いて私はかういふ事を考へた。この今の北京の宮殿は、廢址――これから廢址にならうとする第一歩の光景であるといふ事を。

紫禁城内乾清宮（その一）

今まで榮えてゐたものが漸く廢址にならうとするその最初の狀態であるといふ事を、だから、私たちの樣な單に見物の旅客には、雄大な規模だとか、流石は支那の宮殿だとか、かうした物はどこにもあるまい、外國にもあるまいとか、あの黄色い瓦の美しさはどうだとか、すべてさういふ風に外面的に、また無關心に見られるであらうけれども、支那人に取つては――寧ろ清朝の遺臣

(一) 太祖奴爾哈赤が明を滅して建てた國で、宣統帝に至つて共和國となつた。その間二百十二主、二百九十七年。



紫禁城内乾清宮（その二）

らうとする最初には、どこでも必ず北京の宮殿乃至は天壇の樣な光景を呈するのであらうと私は考へた。私は深く人生興亡の事を頭に繰返さずにはゐられなかつた。私は大きな美しい殿堂から殿堂へと歩いて行く花崗石の鋪道の石の隙間から草の生えてゐるなどに取つては、奈良朝の詩人が奈良の都の衰へて跡になつて行つたのを歎いたより、より以上に感慨無量であらねばならないのであつた。私はじつと立ち盡して、あたりを眺めた。私はこの宮殿が全く亡くなつてしまつて、洛陽乃至長安の樣に、單にその位置だけが指點される樣になる時の事を頭に浮べた。

奈良や平泉やローマに限らず、廢址にな

(一) 今の河南省河南府。古代周公の營んだ洛邑の地で、後漢から洛陽と改められた。

のを、何とも言はれない心持で眺めた。

少くとも今はまだ美しい。觀覽する者の眼を見はらせずにはおかない程美しい。あの黄色いいらかの日に映じてゐる樣は……。あの金色の額や屋角の的皪としてあたりに輝いてゐる樣は……。やはり支那は大きい。地形が大きいだけそれだけ大きい。この宮殿を見ただけでも、その雄大佳麗なのに壓倒される。外國に行つても、とてもこの光景は認め得られまい。――其所に行つた者は、誰でもさういふ風に思はずにはゐられないであらう。條件なしに眼を見はらされ、心を引寄せられ、感歎の聲を餘儀なくさせられるだらう。しかし、これが何時まで殘るだらうか。民國(一)政府はこれを十分に保護して、千年の後まで保存させるであらうか。否、今でさへ金を取つて人に見せてゐるくらゐだから、とてもさういふ事は望まれないだらう。かうした光景のこのまゝ保存されるのは、百年もむづかしい

(一)中華民國の政府。

かも知れない。或は洛陽や長安の樣になるかも知れないけれども、とにかく今の光景は全く亡くなつてしまふであらう。私は單に遊覽者の心持でそれを眺めてゐる事は出來ない樣な氣がした。

それに比べて私たちは幸福だとつくづく私は思つた。奈良の廢墟が今でもはつきり殘つて居り、大極殿(一)や龍尾道(二)の所在もそれと指ざされ、その周圍にある、北京で言へば、西山(三)と言つた樣な所にある古い寺には、優秀な佛像が依然として殘つてゐるといふ事は、これは萬世一系のお蔭ではないか。內亂にも外寇にも壞されなかつた私たちの皇室の有難さではないか。私はそれに對して深い誇と有難さとを感ぜずにはゐられなかつた。私はまた大きな丹塗の丸柱の立つてゐる殿堂の中を、無限の感慨に滿されながら、それからそれへと歩いて行つた。

――海をこえて――

(一)古、八省院の正中にあつて天皇の朝政を見、または賀正、卽位等の大禮を行はせられた正殿。
(二)古、大極殿の前庭にあつた階段。
(三)元の京兆宛平縣の西にある。燕京八景の一。

一〇　源三位

抑、この源三位入道頼政は、攝津守頼光に五代、三河守頼綱が孫、兵庫頭仲政が子なりけり。保元の合戰の時も御方にて先を駈けたりしかども、させる賞にもあづからず、また平治の逆亂にも、既に親類を捨てて參じたりしかども、恩賞これおろそかなりき。大内の守護にて年久しうありしかども、昇殿をばゆるされず。年たけ齡傾いて後、述懷の和歌一首詠みてこそ昇殿をばしたりけれ。

人知れぬおほうち山の山守は
木がくれてのみ月を見るかな

これに依つて昇殿をゆるされ、正下、四位にて暫くありしが、尙三位を心にかけつゝ、

のぼるべきたよりなき身は木のもとに

しひをひろひて世をわたるかな

さてこそ三位はしたりけれ。やがて出家して、源三位入道頼政とて、今年七十五にぞなられける。

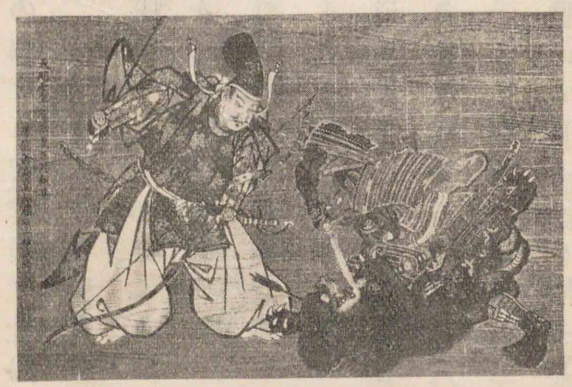
この人一期の高名と思しき事は多きが中にも、殊には仁平の比ほひ、近衛院(一)御在位の御時、夜な〳〵おびえさせ給ふ事ありけり。有驗の高僧、貴僧に仰せて、大法、祕法を修せられけれども、その驗なし。御惱は丑の刻ばかりの事なるに、東三條の森の方より黑雲の一叢立來つて、御殿の上に蔽へば、必ずおびえさせ給ひけり。これに依つて公卿僉議ありけり。去んぬる寛治の比ほひ、堀川院(二)御在位の御時、主上しかの如くおびえたまぎらせ給ひけり。その時の將軍義家朝臣、南殿の大床に候はれけるが、御惱の刻限に及びて鳴弦する事三たびの後、高聲に「前の陸奥國守源義家。」と名のりたりければ、聞く人身の毛よだつて、御惱必ず怠らせ給ひけり。然れば則ち先例に任せ

一期
(一)第七十六代近衛天皇。
(二)第七十三代堀河天皇。

て、武士に仰せて警護あるべしとて、源平兩家のつはものゝうちを選ませられけるに、この頼政をぞ選み出されたりける。その時は未だ兵庫頭にて候はれけるが、申されけるは、「昔より朝家に武士を置かるゝ事は、逆反の者を退け、違敕の輩を滅さんが爲なり。目にも見えぬ變化の物仕れと仰せ下さるゝ事未だ承り及ばず。」と申しながら、敕宣なれば召に應じて參内す。頼政、頼みきつたる郎等、遠江國の住人猪早太に、母衣の風切はいだりける矢負はせて、唯一人ぞ具したりける。我が身は二重の狩衣に、山鳥の尾をもてはいだりける鋒矢二筋、滋籐の弓に取添へて、南殿の大床に伺候す。頼政矢二つ手挾みける事は、雅頼卿(一)その時は未だ左少辨にておはしけるが、「變化の物仕らんずる仁は頼政ぞ候らん。」と選み申されたる間、一の矢にて變化の物射損ずる程ならば、二の矢には雅頼辨のしや頸の骨を射んとなり。案の如く日比人の申すにたがはず、御惱の刻限に及んで、

(一)雅兼の子。中納言、正三位。

東三條の森の方より、黑雲一叢立來つて、御殿の上にたなびいたり。頼政きつと見上げたれば、雲の中に怪しき物の姿あり。射損ずる程ならば、世にあるべしとも覺えず。さりながら矢取つて番ひ、「南無八幡大菩薩。」と心のうちに祈念して、よつ引いてひやうと放つ。手答してはたと中る。「得たりやおう。」と、矢叫をこそしてんげれ。猪早太つと寄り、落つる所を取つて押へ、柄も拳も透れ〳〵と、續け樣に九刀ぞ刺したりける。その時上下手んの手に火を點して、これを御覽じ見給ふに、頭は猿、軀は狸、尾は蛇、手足は虎の如くにして、鳴く聲ぬえにぞ似たりける。怖しなども愚かなり。主上御感の餘りに、獅子王と申す御劍



源三位頼政（高嵩谷筆）

（鵺）

(一)藤原頼長。

(二)第七十八代二條天皇。

を下さる。(一)宇治の左大臣殿これを賜はりついで頼政に賜はんとて、御前の階を半ばばかりおりさせ給ふをりしも、頃は卯月十日餘りの事なれば、雲居に杜鵑二聲三聲音づれて通りければ、左大臣殿

ほとゝぎす名をも雲居にあぐるかな

と仰せられかけたりければ、頼政右の膝を突き、左の袖を廣げて、月を少しそば目にかけつゝ、

弓張月のいるにまかせて

と仕り、御劍を賜はりて罷り出づ。この頼政卿は武藝にも限らず、歌道にもまた勝れたりとぞ、時の人々感じあはれける。さてかの變化の物をば、うつぼ船に入れて流されけるとぞ聞えし。

また應保の比ほひ、(二)二條院御在位の御時、ぬえといふ化鳥禁中に鳴いて、屢、宸襟を惱まし奉る事ありけり。然れば先例に任せて、頼政をぞ召されける。頃は五月二十日餘り、まだ宵の事なるに、ぬえ唯一

かづく

(一)權大納言藤原實能の子。

(二)支那春秋時代の楚の有名な射術の名人。

聲音づれて、二聲とも鳴かざりけり。目ざすとも知らぬ闇ではあり、姿形も見えざりければ、矢つぼをいづくとも定め難し。頼政が謀に、先づ大鏑取つて番ひ、ぬえの聲したりける内裏の上へぞ射上げたる。ぬえ、鏑の音に驚いて、虚空にしばしぞひらめいたる。次に小鏑取つて番ひ、ひいふつと射切つて、ぬえと並べて前にぞ落したる。禁中さゞめきわたつて、頼政に御衣をかづけさせおはします。今度は大炊御門の右(一)大臣公能公これを賜はりついで、頼政にかづけさせ給ふとて、「昔の養由(二)は雲の外の雁を射き。今の頼政は雨の中のぬえを射たり。」とぞ感ぜられける。

五月やみ名をあらはせる今宵かな

と仰せられかけたりければ、頼政

たそがれ時もすぎぬとおもふに

と仕り、御衣を肩に掛けて罷り出づ。その後伊豆國賜はり、子息仲綱

受領になし、我が身三位して、丹波の五箇(一)の庄、若狭の東宮川(二)を知行して、さておはすべかりし人の、よしなき謀叛起いて、宮をも失ひ參らせ、我が身も子孫も滅びぬるこそうたてけれ。　――平家物語――

(一)今京都府中郡五箇村。
(二)今福井縣遠敷郡宮川村。
(三)字は孟德、勢を得て魏の國王となつた。後漢の獻帝の建安二十五年（西紀二二〇年）歿。
(四)曹操「短歌行」の詩句。
(五)賴光の弟。武勇の將。永承三年（一七〇八年）歿、年八十一。
(六)「吹く風をなこその關と思へども道もせに散る山櫻かな」
(七)岩手縣膽澤郡衣川村。情致おくゆかしい趣。

自修文

文學と氣品

文學といふものは、人間界の飾であり、國家の誇であつて、個人から見れば、高尚な氣品の流露である。立派な文學のある國は、その國の品格も一段と高く見え、文學の嗜がある偉人は、一入懷かしい心持がする。魏の曹操(三)はその事功の上から見ては、餘り好かれぬ人物であるが、槊を横たへて、「月明らかに星希に」と歌つた一事を想ひ出すと、何となく慕はしくなつて來る。

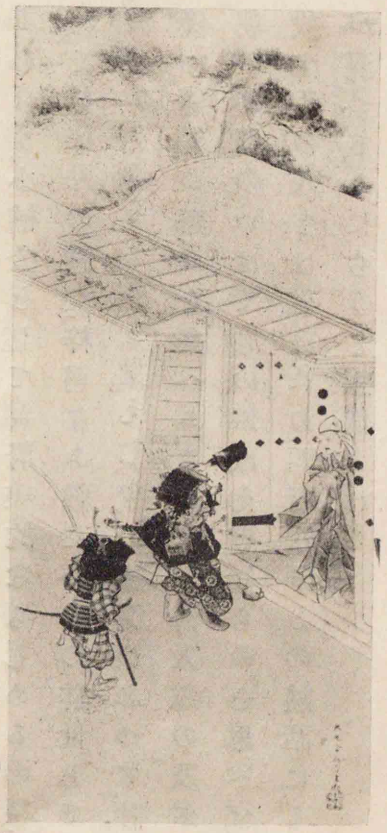
源賴光や賴信(五)よりも八幡太郎義家の方がえらく思はれるのは、勿來關に馬を停めて、「道もせに散る山櫻かな」と詠んだ風流、衣川に矢を番へて「衣のたてはほころびにけり」と呼止めた情致が

ある爲で、これはその後の爲義にも、爲朝にも、義朝、義平にも眞似の出來ぬ所。源三位賴政の「しひを拾ひて世を渡るかな」は餘り感心せぬが、「弓張月のいるに任せて」(一)「埋木の花さくこともなかりしに」などの韻事があつた爲に、後世にまでその名が高くなつたのであらう。小楠公をして一層美的ならしめるのは、「かりの契をいかで結ばん」(二)の歌と、「梓弓なき數にいる」の辭世とである。平忠盛(三)に「波ばかりこそよると見えしか。」(四)の風流があつて、眇の俄殿上人も、優に優しい感じを與へる。これは淨海入道(五)の及ぶ所ではない。賴朝の「陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬ」(六)を思へば、義經や範賴を殺す程の人とは思はれぬ。西行法師との談話にも、幾分の風流談が混つてゐたらうと想像される。

その子實朝に至つては更に歌の名手。これは源氏の武將中の第一で、曩祖(七)八幡太郎の文學的方面は、茲に最大な發達を遂げてゐる。賴朝の霸業は三代で亡びたが、實朝の文學は千古不朽であ

(一)「埋木の花さくこともなかりしにみのなるはてぞあはれなりける」
韻事　風流な事がら。
(二)「とても世にながらふべくもあらぬ身のかりの契をいかで結ばん」
(三)清盛の父。鳥羽上皇に寵遇され、群卿にそれまれ豐明の節會に身の眇を取立てて辱しめられた。
(四)「有明の月もあかしの浦風に波ばかりこそよると見えしか」
(五)平清盛。
(六)「陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬ書きつくしてよつぼの石ぶみ」
曩祖　先祖。

る。文學者の文學は當然であるが、政治家なり、武人なり、他の方面の人で風流談のあるのは、非常にその人品を高くするもので、時にはその人の缺點まで掩ふ樣な心持がする。



平忠度（小堀鞆音筆）

實朝が源氏の末路を飾ると同じ樣に、平家の末路を飾る者は忠度である。平家の公達には歌を詠んだ人は澤山あるが、忠度が都落に馬を乘返して俊成卿の門を叩いた一話は、最も麗しい永久な語草である。

武士は情を知らなければならぬ、武人として文事の嗜がなくてはならぬとは、武家の家訓として必ず教へた事がらである。それであるから、戰國時代にも風流の心得のある武人が隨分多かつた。承久の役に院宣を讀み得る人がなかつたなどといふのは、眞の武士のなかつた證據。北條氏康、毛利元就、太田道灌などは皆和歌風流の嗜が深かつた。豐臣秀吉を無風流な人と思ふのは大間違、吉野の花見には諸大名もまたそれ〴〵詠歌をものしてゐる。上杉謙信が「霜滿軍營」の詩吟は、人をして先づこれに同情せしめる所以で、その襟度の遙かに武田信玄以上だと思はしめる最大原因である。その家來の直江兼續も、文學の素養からその風采を想望せしめる。多くの傳說を集め得た源義經や、武將の典型と見られた加藤清正に風流韻事の傳はらないのは、何となく物足らない心地がする。梶原景時、明智光秀の時にとつての連歌などが、稍その憎しみを減じさせるのも、文學のお蔭である。

幕末の志士は必ず何物かを口吟んでゐる。藤田東湖の回天詩や正氣歌などはその尤なるもので、梅田雲濱の「妻臥病牀兒叫飢」

(一)忠盛の子。一の谷の戰に討死した。
公達　親王、攝家、清華等の貴族の子弟。
(二)壽永二年七月源義仲に京師に逼られて平家は安德天皇を奉じて西奔した。
語草　話のたね。
家訓　家のをしへ。
院宣　院中の有司が院旨を奉じて下知する文書。
(一)文祿三年（二五四年）二月二十五日、秀次、家康、前田利家等と吉野に赴いて花見をした。
(二)九月十三日の詩句。
襟度　むねのうち。人を容れる度量。
(三)上杉謙信の近侍。後家康に屬し、米澤に封ぜられた。元和五年（二七九年）歿、年六十。
風采　人がら。
想望　思ひ慕ふこと。
典型　てほん。
(四)名は彪。水戸藩士。安政二年（二五一五年）歿、年五十。
(五)名は源次郎。若狹の人。安政六年（二五一九年）獄死、年四十四。
(六)訣別の詩句。

(一)名は綱記。越前藩士。安政六年斬られた年二十七。
(二)獄中作の詩句
(三)名は醇。山陽の第三子。安政六年斬られた。年三十五。
(四)辭世の詩句。
(五)名は啓。信濃松代藩士。元治元年(二五二四年)攘夷黨の爲に京師に斬られた。年五十四。
(六)名は寅次郎。長州萩藩士。安政六年斬られた。年二十九。
(七)京都清水寺の僧。安政五年薩摩潟に入水。年四十六。
(八)通稱六郎。攝津の人。元治元年刑死。年五十二。
(九)野村もと。慶應三年(二五

橋本景岳の「誰知松柏後凋心」(一)、(二)賴三樹三郎の「誰題日本古狂生」(三)を初め、(五)佐久間象山でも、(六)吉田松陰でも、(七)僧月照でも、(八)伴林光平でも、乃至は望東尼(九)でも、或は詩に、或は歌に、その心事は永くその文學に傳はつて、忘れようとしても忘れられない樣になつてゐる。これ等の志士は天下の憂に先だつて憂へた人。その志を繼いだ人々が、却つて明治の世には公となり、侯となり、伯となつて榮爵を辱うしたが、そんな人よりも、一片の詩、一首の歌を留めて國難に斃れた人の方が、千秋萬古、人の情緒を動かすであらう。

一一　小松内府　その一

(一)太政入道は斯樣に人々數多縛め置きても、尙心ゆかずや思はれけん、既に赤地の錦の直垂に、黑絲をどしの腹卷の白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜のついでに靈夢を蒙つて、嚴島大明神よりうつゝに賜はられたりける銀の蛭卷したる小長刀、常

二七年)寂、年六十二。
(一)太政大臣平清盛。入道して淨海と稱した。
ゆゝし
(一)清盛の叔父忠正。
(二)崇德上皇。
(三)崇德院の第一皇子重仁親王。
(四)清盛の父忠盛。
(五)鳥羽法皇。
(六)一八一九年。
(七)藤原信賴。
(八)源義朝。
(九)藤原經宗。
(一〇)藤原惟方。
(二)藤原成親。

の枕を放たず立てられしを脇に挾み、中門の廊にぞ出でられたる。大方その氣色ゆゝしうぞ見えし。

「貞能」と召す。筑後守貞能は木蘭地の直垂に緋をどしの鎧著て、御前に畏まつてぞ候ひける。入道宣ひけるは、「いかに貞能、この事いかが思ふぞ。保元に平右馬助を始めとして、一門半ば過ぎて新院の御方に參りにき。一の宮の御事は故刑部卿の殿の養君にてましましかば、かたゞ見放ち參らせ難かりしかども、故院の御遺誡に任せて、御方にて先を駈けたりき。これ一つの奉公。次に平治元年十二月、信賴、義朝が謀叛の時、院、内を取り奉つて大内に立籠り、天下暗闇となつたりしにも、入道隨分身を捨てて兇徒を追落し、經宗、惟方を召縛めしに至るまで、君の御爲に既に命を失はんとする事たびたびに及ぶ。されば人何と申すとも、いかでこの一門をば七代までは思し召し棄てさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづら者、

(一)藤原師光。入道して西光と言つた。

讒奏

(二)後白河法皇。

(三)平重盛の邸。

(四)鳥羽、後白河兩法皇の離宮。今の京都市東山區三十三間堂の東南。

西光と申す下賤の不當人が申す事に君のつかせ給ひて、やゝもすればこの一門滅さるべき由の御結構こそ然るべからね。この後も讒奏する者あらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵となつて後は、いかに悔ゆとも益あるまじ。暫く世を鎭めん程、法皇を(二)ば鳥羽の北殿へ移し參らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし參らせんと思ふはいかに。その儀ならば、定めて北面の者共がうちより、矢をも一つ射んずらん。その用意せよと侍共にふるべし。大方は入道、院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍おかせよ。著背長取出せ。」とこそ宣ひけれ。主馬判官盛國、急ぎ小松殿へ馳參つて、(三)「世ははやかう候。」と申しければ、大臣聞きもあへ給はず、「嗚呼、はや成親卿の首の刎ねられたんな。」と宣へば、「その儀にては候はねども、入道殿の御著背長を召され候上は、侍共も皆うち立つて、只今院の御所法住寺殿へ寄せんとこそ出立ち候ひつれ。暫く世を鎭めん程、法皇をば鳥羽の

禪門

(一)清盛の邸。

さやめく

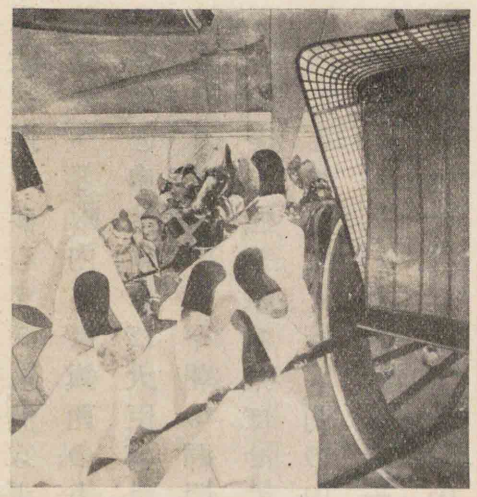
北殿へ遷し參らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし參らせうとは候へども、內々は鎭西の方へ流し參らせんとこそ議せられ候ひつれ。」と申しければ、大臣、何によつて只今さる事のおはすべきとは思はれけれども、今朝の禪門の氣色、さる物狂ほしき事もやおはすらんとて、急ぎ車を飛ばせて、(一)西八條殿へぞおはしたる。

門前にて車よりおり、門の內へさし入りて見給ふに、入道腹卷を著給ふ上、一門の卿相雲客數十人、各色々の直垂に思ひ〳〵の鎧著て、中門の廊に二行に著せられたり。その外、諸國の受領、衞府、諸司などは緣にゐこぼれ、庭にもひしと並みゐたり。旗竿など引側め〳〵、馬の腹帶を固め、冑の緒を締め、只今皆うち立たんずる氣色どもなるに、小松殿、烏帽子直衣に大紋の指貫のそば取つて、さやめき入り給へば、殊の外にぞ見えられける。

入道伏目になつて、あはれ例の內府が世をへうする樣にふるま

面はゆし

ふものかな。大きに諫めばやと思はれけれども、流石子ながらも、内には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を亂らず、禮儀を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹卷を著て向はん事、流石面はゆう恥づかしうや思はれけん、障子を少し引立て、腹卷の上に素絹の衣を、あわて著に著給ひたりけるが、胸板の金物の少し外れて見えけるを隱さうと、頻りに衣の胸を引違へ引違へぞし給ひける。大臣は舍弟宗盛卿の座上に著き給ふ。入道宣ひ出さるゝ事もなく、大臣もまた申し上げらるゝ旨もなし。



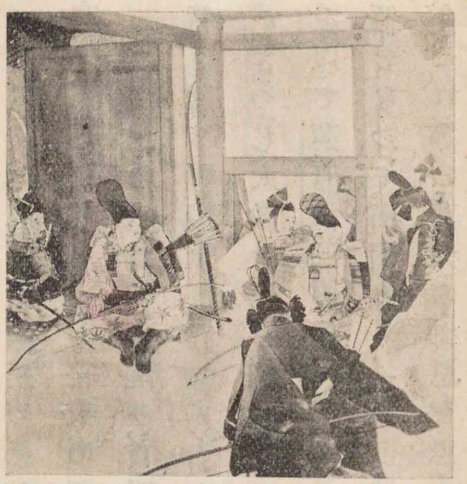
小松内府重盛（高橋廣湖筆）

一二　小松内府　その二

稍あつて入道宣ひけるは、「あの

一向

粟散の境



小松内府重盛（高橋廣湖筆）

にやいかに。」とあきれ給へば、稍あつて大臣涙を抑へて、「この仰承り候に、御運ははや末になりぬと覺え候。人の運命の傾かんとては、必ず惡事を思ひ立ち候なり。また御有樣を見參らせ候に、更に現とも覺えず候。流石我が朝は邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫、國の主として、天兒屋根命の御末、朝の政を掌らせ給ひしよ

成親卿が謀叛は、事の數にも候はず、一向法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を鎭めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し參らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし參らせんと思ふはいかに。」と宣へば、大臣聞きもあへ給はず、はらはらとぞ泣かれける。入道、「さていかに、

破戒無慚

(一)「普天之下、莫レ非ニ王土一、率土之濱、莫レ非ニ王臣一。」(詩經)

(二)支那山西省永濟縣の南にある。

(三)伯夷、叔齊。

蓮府

槐門

進止

りこの方、太政大臣の官に至る人の、甲冑をよろふ事禮儀を背くにあらずや。就中御出家の御身なるに、法衣を脱捨てて忽ちに甲冑をよろひ、弓箭を帶しましまさん事、内には破戒無慚の罪を招くのみならず、外には仁義禮智信の法にも背き候ひなんず。かたがた恐ある申事にて候へども、心の底に旨趣を殘すべきにも候はず。先づ世に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩これなり。その中に最も重きは朝恩なり。(一)普天の下王地にあらずといふ事なし。されば(二)かの潁川の水に耳を洗ひ、首陽山にわらびを折りし賢人も、(三)敕命の背き難き禮儀をば存知すとこそ承れ。いかに況や、先祖にも未だ聞かざつし太政大臣を極めさせ給ふ。いはゆる重盛が無才愚暗の身を以て蓮府、槐門の位に至る。しかのみならず國郡半ばは一門の所領となつて、田園悉く一家の進止たり。これ希代の朝恩にあらずや。今これ等の莫大の御恩を思し召し忘れさせ給ひて、みだりがはしく法皇を傾け參らせ給はん事、天照大神、正八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひなんず。それ日本は神國なり。神は非禮を受け給ふべからず。この一門が代々の朝敵を平げて、四海の逆浪を鎭めし事は無雙の忠なれども、その賞に誇る事は、傍若無人とも申しつべし。然れども當家の運命未だ盡きざるに依つて、事既に露れ候ひぬ。その上、仰せあはせらるゝ成親卿を召置かれぬる上は、たとひ君いかなる不思議を思し召し立たせ給ふとも、何の恐か候べき。所當の罪科行はれぬる上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には愈、奉公の忠勤を盡し、民の爲には益、撫育の哀憐を致させ給はば、神明の加護にあづかつて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明、佛陀感應あらば、君も思し召し直す事などか候はざるべき。

哀憐

佛陀の冥慮

これは尤も君の御ことわりにて候へば、かなはざらんまでも、院中を守護し參らせ候べし。その故は、重盛はじめ敍爵より今大臣の

一入再入

大將に至るまで、しかしながら君の御恩ならずと言ふ事なし。その恩の重き事を思へば、千顆、萬顆の玉にも超え、その恩の深き色を案ずれば、一入、再入の紅にも尙過ぎたらん。然らば院中に參り籠り候べし。悲しきかな、君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、迷廬八萬の巓よりも尙高き父の恩忽ちに忘れんとす。傷ましきかな、不孝の罪を逃れんとすれば、君の御爲には既に不忠の逆臣ともなりぬべし。進退これ谷れり。是非いかにも辨へ難し。申し受くる所詮は、唯重盛が首を召され候へ。その故は、院參の御供をも仕るべからず、また院中をも守護し參らすべからず。富貴といひ、榮華といひ、朝恩と申し、重職といひ、かたゞ〳〵極めさせ給ひぬれば、御運の盡きん事難かるべきにあらず。富貴の家には祿位重疊せり、二たび實なる木は、その根必ずいたむと見えて候。心細くこそ候へ。何時までか命生きて亂れん世をも見候べき。唯末代に生を受けて、かゝる憂目に逢ひ候

(一)國文學者、文學博士。早稻田大學教授。明治七年山形縣に生れた。新文章講話、國歌の胎生及び發達、軍記物語研究等の著がある。

(二)後白河天皇より安德天皇まで。(一八一六—一八四三年)

重盛が果報の程こそ拙う候へ。只今も侍一人に仰せ附けられ、御つぼの中へ引出されて、重盛が頭を刎ねられんずる事は、いと易い程の御事でこそ候はんずらめ。これを各聞き給へ。」とて、直衣の袖も絞るばかりにかき口説き、さめ〴〵と泣き給へば、その座に並みゐ給へる平家一門の人々、皆袖をぞぬらされける。

——平家物語——

一三　平家物語論

五十嵐力(一)

長き平安朝の公卿文明は、一旦清盛に滅されたが、その亡魂は平家に魅入つて辛うじて蘇り、再び二十年の果敢ない華やかな夢を見た。「奢る平家」はかくて藤原氏に得た所によつて滅び、「世になし源氏」はその平家の失つたもの(貶)を得て興つた。この二者得喪の關係を骨として、平家の榮華沒落の樂しさ、悲しさを寫した物が平家物語である。平家が歷史の表舞臺を占めた、保元(二)より壽永までの三十年

間、――この三十年間に於ける空前絶後ともいふべき平家の榮華と沒落とは、いかにこの物語に描かれたか。

先づ序幕は「祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。驕れる者久しからず、唯春の夜の夢の如し。猛き者も遂には亡びぬ、偏に風の前の塵に同じ。」といふ物悲しげな、面の華やかさを哀愁の情調で裏うちした樣な口調、文體、趣味、すべての點に於て「平家」一篇の代表とも見える文句を以て始つてゐる。此所へ漢土の趙高(一)、王莽(二)、安祿山(三)、本朝の將門、純友等を前驅として堂々と現れ出たのが、六波羅の入道、前の太政大臣平の朝臣清盛で、いはゆる「心も言葉も及ばれぬ」彼の驕奢横暴が、先づ小氣味よく描かれてある。彼は本來、殿上の交をだに嫌はれた者の子である。かの西光が彼を罵つて、「抑、御邊は故刑部の卿忠盛の嫡子にておはせしが、十四五までは出仕もし給はず、故中御門の藤中納言家成卿

(一)秦の佞臣。始皇帝の死後、權を專らにした。三世皇帝の時殺した。(西紀前二〇七年)

(二)漢の逆臣。前漢の帝位を奪つて國を新と號したが、後漢の劉秀に滅ぼされた。(西紀在位二三年。)

(三)唐の反將。玄宗皇帝に仕へて天寶の大亂を起した。西紀七五七年殺。

の邊に立入り給ひしをば、京童は例の高平太とこそ言ひしか。」と言つた通り、はかなき中納言家に立入るをすら面目とした程の身分であつたが、それが運命の後押で、一躍して太政大臣となつた。世に清盛程幸運な者はあるまい。

彼には格別の武略があるわけではない。保元には爲朝の鋭鋒を避けて弱敵に向ひ、平治には冑を後向にかぶつた程のあわて者でありながら、不思議に吉事のみうち續いて、身は臺閣の高きに上つた。のみならず、彼の惡運の强さは、五十一歳の時大病に罹つて、存命の爲に出家したが、それと共に病は立所に癒えて、天命を全うした。そしてその病癒えて後の彼の半生は、殆ど横紙破のわがまゝに費されたのである。

治に居て亂を忘るゝは人の常である。まして言ふ事は皆行はれ、なす事は悉く從はれるといふ彼の世盛の段になれば、もはや武を

樞要の顯職

練る必要がない。かゝる時に、必然に人心を壓して起るものは、遊惰安逸の慾である。是に於て、感情、文藝を主とした平安朝の公卿文明は、今や赫灼の光を放つて彼等の眼に映じた。彼等は甲冑を脱して綾羅錦繡を身に纏うた。烏帽子のため樣、衣紋のかき樣に風雅を競ふ事となつた。かくて朝廷樞要の顯職、多くは平族の占むる所となり、一門の公卿十六人、殿上人三十餘人、諸國の受領、衞府、諸司、都合六十餘人の多きに至つた。その外、清盛の女八人、皆とり〴〵に榮え、或は召されて女御となり、或は后に立つて國母として院號を蒙らせらるゝに至つた。

しかしながら、この威勢も、得意も、驕奢も、皆一場の夢であつた。公卿のもつ宮廷文明が見る間に彼等を軟化し、やがて平家の一門は、政治を知らぬ大臣、納言と、武事に習はぬ大將、中將、戰爭を忘れて主人の奢侈風流の手助をする家子、郎黨とを以て滿された。かくして

(一)平經正が恩賜の琵琶を仁和寺法親王の宮にお返し申した事を言ふ。
(二)平忠度が藤原俊成を訪れたこと。
(三)清盛の子。武勇の名高く、壽永四年(一八四五年)壇ノ浦の戰に奮死した。年三十四。
(四)清盛の弟。平治の亂で名をあげ壽永四年自殺した。年五十七。
(五)敦盛の子。能登守。壇ノ浦の戰に義經と一騎打をした。
(六)治承四年(一八四〇年)平維盛が頼朝を討つて富士川で破れた事。

身方とは離れ、合戰の期には違つても、手すさびの樂器は失ふまいとする貴公子を生じた。一門の運命の爲に自重すべき可惜身命を、甘んじて歌友だちの訪問に賭する武將を生じた。一門の氣風のかくなる上は、知盛、敦盛、敦經、景清等二三の除外例者の憤激ももう及ばぬ。かくして一世を聳動した平家の榮華は、重盛の哀死、清盛の憤死を境とし、富士川水禽の羽音を轉機として幻の如くに消え、一門の運命は急轉直下、都を追はれ、一ノ谷を追はれて、やがて西海の波と消えた。蓋し重盛の聰明盛德もその家運の維持に寸效がなかつたのみならず、彼も武力養成の必要には全く著眼せず、一門の文弱を矯めようとする考はなかつたのである。否、彼自ら富貴、榮華、朝恩、重職を極める事を無上の榮譽として喜んだのである。賢明なる彼も、つまりは時代の波に漂つた一人で、聰明忠誠なる君子人の彼の苦心が、偶、平家の滅亡を早くする原因となつたのも、不測の天意を

暗示して、この物語に一層の哀さを添へてゐる。

この平家の一門の榮枯の、華々しい、目覺しい激變は、平家物語の脊梁をなして、この物語に稀有の興味と情調とを與へてゐるが、その間には、更に平家の運命を壓縮した樣な幾多の哀な挿話があつて、本筋を引立たせてゐる。祇王(一)も、西光も、成親も、俊寛(二)も、義仲も、判官義經も皆その小縮圖であつて、平家はこれ等を基礎とし、背景とし、添景として、更に大規模に人生の悲哀を歌つた物である。而してこれ等の小話を踏まへて、平家物語の描き出した悲哀の最高調は、實に二位の尼主上を抱いて入水する一節にある。「主上今年は八歳にぞならせおはします。御年の程よりは遙かにねびさせ給ひて、御かたちいつくしう、あたりも照輝くばかりなり。御髮黑うゆら〳〵と御背中過ぎさせ給ひけり。主上をすかし參らせて、『この國は粟散邊土と申して、物憂き境にて候。あの波の下にこそ、極樂淨土とてめでたき都の候へ。それへ具し參らせ候。』と、樣々に慰め參らせしかば、山鳩色の御衣にびんづら結はせ給ひて、御涙におぼれ、小さう美しき御手を合せ、先づ東に向はせ給ひて、伊勢大神宮、正八幡宮に御暇申させおはしまし、その後西に向はせ給ひて、御念佛ありしかば、二位殿やがて抱き參らせて、『波の底にも都の候ぞ。』と慰め參らせて、千尋の底にぞ沈み給ふ。悲しきかなや無常の春の風、忽ちに花の御姿を散し、いたましきかな分段の荒き波、玉體を沈め奉る。」と。何等の哀音ぞ。厭はせ給ふ幼帝を、色々にこしらへ慰め參らせて、抱き奉りて海中に躍り入る。「千尋の底に沈み給ふ。」の一句、王者の音もなく沈み行かるゝ御有樣を、まのあたり見奉る如くである。海底に達せられた刹那、地底天上より世を壓して殷々と響き始めた哀歌は、「悲しきかなや無情の春の風」以下の數句で、この哀歌と共に、平家と平安朝の舊文明とは永久に亡び去つた。「祇園精舍の鐘の聲」の序曲は層々歩

(一)京都の白拍子。清盛に召されて西八條の邸にゐたが、後出家した。時に年二十一。

(二)成親等と平氏を滅さうとして果さず、治承元年(一八七年)鬼界ヶ島に流され、翌年歿した、年三十七。

ねび

分段

を進めて、此所に最高調に達し、而してこの哀絶の物語は、この最後の調子を一層悲壯にせんが爲に、此所に神璽と寶劍と幼帝とを奪ひ去つたのである。我が國古來、未だ曾てこの如き悲壯の曲はない。而してこの最高調の哀歌は長く尾を曳いて、大原御幸にその餘韻を收めてゐるのである。

見よ、唯一人大原の奥に世を遁れて、「昔は先づ東に向はせ給ひて、伊勢大神宮、正八幡宮伏し拜ませおはしまし、天子寶算千秋萬歲とこそ祈り申させ給ひしに、今は引きかへて、西に向はせ給ひて、過去精靈必ず一佛土へと祈らせ給ふ」哀ふかき女院の、御庵室の御障子にあそばされた御歌を。

この頃はいつならひてかわが心
大宮人のこひしかるらん

天上の樂しみも地獄の苦しみも、今は回顧の眼に靜かに寂しく

映る樣になつた。この時に至つても、そゞろにこひしきは大宮人の生活である。もとは武人の女たる御身の、何時ならひてか、宮廷の公卿生活のこひしくなつた事であらう。あはれ女院の御心は平家一門の心であつた。彼等は何時しか公卿の生活に中毒して、甘んじてその犧牲となり、死に至るまで公卿生活の甘き夢に憧れてゐた。平家の歷史は寂しいけれども甘い、悲痛だけれども醉心地の歷史である。稀有の悲劇だけれども、恍惚として夢心地に味はひ得る悲劇である。而してこの悲劇の樞要部を占めて、壯快な前曲を奏でたのが清盛、結尾の哀音を奏でたのが清盛の妻二位の局、而して最後にこの哀音の餘韻の搖曳を奏でて、この作に千鈞の寂しき落著を與へたのが清盛の女なる女院である。

（新國文學史に據る）

一四　青葉若葉

あらたふと青葉若葉の日の光　芭蕉

目には青葉やまほとゝぎす初がつを　素堂

鞘ばしる友切丸やほとゝぎす　蕪村[一]

杜鵑なくや湖水のさゝにごり　丈草

一聲の江に横たふやほとゝぎす　芭蕉[二]

蘭田刈つて水雞に遠き寢覺かな　蓼太[三]

行水の捨てどころなし蟲の聲　鬼貫

石工ののみ冷したる清水かな　蕪村[四]

橋おちて人岸にあり夏の月　太祇

夕立や家をめぐりてあひる鳴く　其角

夕涼よくぞ男にうまれける　其角

(一)内藤林右衛門。もと尾州犬山の藩士、後禪門に入り、俳諧を學び、蕉門に入つた。寶永元年(一七〇四)寂、年六十二。

(二)大島陽喬。俳人。江戸の人。天明七年(一七八七)歿、年四十七。

(三)上島治房。俳人。攝津の人。元文三年(一七三八)歿、年七十八。

(四)炭氏。俳人。江戸の人。明和八年(一七七一)歿、年六十三。

一五　信濃路の旅

正岡子規[一]

上野より汽車にて横川に行き、馬車にて碓氷峠を越ゆ。鳥の聲耳もとに落ちて、見上ぐれば千仞の絶壁、百尺の老樹、聳え〳〵て天も高からず。樵夫の唄足下に起つて、見おろせば、つた、かづらを傳ひて渡るべき谷間に、腥き風さつと吹きどよめきて、萬山自ら震動す。遙かに來し方を見返るに、山また山峨々として、路いづくにかある。寸馬豆人と言へるは彼かとばかり疑はれて、

つゞら折いく重の峰をわたり來て
　雲間にひくき山もとの里

日もやゝ暮れかゝれば、四方濛々として、山とも知らず、海とも知らず。駈上る駒の蹄に踏散す雲霧のあはひを見れば、一歩の外は削り立てたる嶮崖の底も幽にて、いと怖し。登れども〳〵窮る所を知

(一)俳人、歌人。名は常規。愛媛縣の人。明治三十五年歿、年三十六。俳諧大要、病牀六尺、獺祭書屋俳句話、俳句帖抄等の著があり、子規全集二十卷に收められてゐる。

(二)群馬縣碓氷郡。

寸馬豆人

あはひ

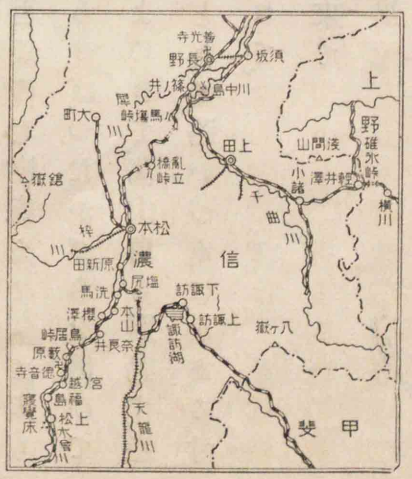
らず。山益〻高く、雲愈〻低し。

見あぐれば信濃につゞく若葉かな

輕井澤は流石に夏尙寒く、隙間漏る淺間おろしに、一重の旅衣、見果てぬ夢を護るに難かり。例ならず疾く起出でて窓を開けば、幾重の山嶺屏風を繞らして、草のみ生茂りたれば、その色、染めたらんよりも麗し。

山々は萌葱淺葱や時鳥

淺間は雲に隱れて、煙もいづこに立迷ふらんと思はる。汽車を驅りて善光寺に詣で、それより川中島を過ぐ。古戰場はいづくの程とも知らねど、山と山とに圍まれて、犀川のめぐるあたりにやあらん。河の水はいたく瘦せて、ほとりの麥畑空しく赤らみたり。



(一)長野市の北部。天台淨土兩宗の有名な古刹。第三十五代皇極天皇の御代の創建と傳へる。

宿一樹影汲一河流
皆是先生結緣

日はくれぬ雨はふり來ぬ旅衣
たもとかたしきいづくにか寢ん

次の日雨晴る。路に立てる芭蕉塚に興を催してたどり行けば、行手遙かに山重なれり。野の狹う尖りて、次第々々に入る山路險しく、弱足に登る馬場峠(一)、さても苦しやと休む足下に、誰が栽ゑしか、珊瑚なす覆盆子(ふくきいち)、旅人も採らねばや、こぼるゝばかりなり。少し登りて、とある樹蔭の葦簾茶屋に憩へば、主婦のもてなしぶり、谷水を五六町の麓に汲みてもて來る汗の滴り、情を汲む一口に浮世の腸は洗はれたり。一樹の蔭、一河の流とや、聖の教も時にあうてこそ有難けれ。

この夜は亂橋といふ怪しの小村に足を留む。隣室の雜談に夢覺

曾木行脚中の子規

(一)長野縣更級郡。猿ケ馬場峠といふ。

されて、つとめて此所を立出づれば、はや爪先あがりの立峠。旅の若衆と見て取つて、馬子が馬に乘れとの勸め。有難や乘りて見れば、旅程氣樂なるものはなし。昨日の馬場峠はなぜに苦しみし。路のあたりに咲く白き花を何ぞと問へば、「これなんうつぎと申す。」と言ふ。いと嬉しくて、

むら消えし山の白雪來て見れば
駒のあがきにゆらぐ卯の花

峠にて馬をおる。鶯の時ならぬ音に驚かされて、

鶯や野を見おろせば早苗取

松本にて晝餉したゝむ。早く木曾路に入らん事のみ急がれて、原(一)新田まで三里の道を馬車に縮めて、洗馬(二)までたどり著き、饅頭にすき腹を肥して、本山(三)の玉木屋に宿る。

本山を出で櫻澤(四)を過ぐれば、此所ぞ木曾の山入。山の景色、水の有

(一)東筑摩郡。松本市の南方。
(二)原新田の南約八キロメートル。
(三)洗馬の南約四キロメートル。
(四)西筑摩郡。本山の南約四キロメートル。

現をぬかす、

(一)櫻澤の南約八キロメートル。
(二)奈良井の南約二キロメートル。
(三)西筑摩郡木祖村字藪原。
(四)西筑摩郡北境の山中から出、美濃、尾張を通つて伊勢灣に注いでゐる。長さ二三二キロメートル。

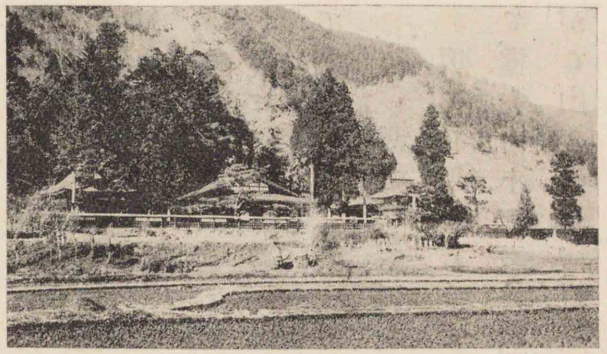
樣、はや尋常ならぬけはひに現をぬかし、桃源遠からずと獨り勇めば、鳥の聲も耳にたちて珍し。

奈良井(一)の茶屋に憩ひて、「ぐみはなきか。」と問へば、「ぐみといふ物は知り侍らず。珊瑚實ならば背戸にあり。」と言ふ。山中に珊瑚、さてもいぶかしと裏に廻れば、やはりぐみなり。あるじの女房深切に採りてくれたり。峽中第一の難所と言ふ鳥居(二)峠は、若葉の風に夢を薫らせて、瘦馬の力に面白う攀登る。

馬の背や風吹きこぼすしひの花

頂にて馬をおり、つく〳〵四方を見おろせば、古木鬱蒼、谷深くして、樵夫の小徑微に隱見す。珍しく晴渡りたる空の青嵐を踏まへながら山を下れば、藪原(三)の驛なり。或家に立寄りてお六櫛を求む。このほとりよりぞ木曾川(四)に沿うて下るなる。白雲をあやどる山脈は愈、迫りて、かぶせかゝらん勢怖しく、奥山の雪を解して清らかなる水

は谷を縫うて、その響凄じ。深き淵の直中に、大いなる岩の一つ突出でたる上に、年ふりたる松の枝面白く、龍にやあらんと思はれたるもをかし。宮越(一)の村はづれに佇む程に、いと古代めきたる翁の釣竿を擔ぎたるが、畫の中より(二)ぞ現れ出でたる。笠をぬぎて慇懃に徳音寺への路を問ふ。翁の言ふ、「さても優しの若者や。旭(三)將軍のなき跡を弔はんとてや此所までは來給へる。此所に茂れる夏木立は八幡の御社なり。彼所の山の上こそ昔の城(四)の址なれ。このわたりの畑も、つはものどもの住みし夢の名殘なるものを、今は桑の木ばかりぞ秀でたる。」と、一つ〳〵に指さす。そゞろに古をしのぶ言葉の端、この翁、謠ならばかき消す樣に失せ



徳音寺（中央本堂　右山門兼鐘樓　左義仲の廟所）

(一)藪原の南方約八キロメートル。
(二)壽永年間（一八四二―一八四五年）の建立。
(三)木曾義仲。
(四)宮越城址。木曾義仲の本城。一名山吹城。

ぬべし。日照山徳音寺に行きて、木曾宣公(一)の碑の石摺一枚を求む。この前の淵を山吹が淵、巴が淵と名づくとかや。福島(二)を今宵の旅枕と定む。木曾第一の繁昌なりとぞ。

翌日朝大雨。待てども晴間なし。傘を購ひ來りて書流す句に、

をりからの木曾の旅路を五月雨

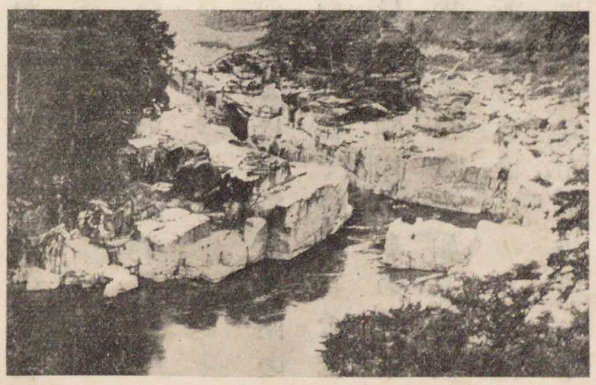
旅亭を出づれば、雨小やみになりぬ。このひまにと急げば、雨の脚に追ひつかれ、木蔭に憩へば、また降りやむ。とにかくと雨になぶられながら、行き〳〵て棧(三)に著きたり。見る目危き兩岸の岩の、數十丈の高さに削りなしたる樣、一雙の屏風を押立てたるが如し。神代の昔よりむし重なりたる苔の、美しう青み渡れるあはひ〳〵に、何げなく咲出でたる杜鵑花の麗しさ。狩野派にやあらん、土佐畫にやあらん。下をのぞけば、五月雨に水嵩增したる川の勢、渦まく波に雲を流して、突きては割れ、當りては碎くる響、大磐石も動く心地して、後

(一)徳音院殿義山宣公の略。義仲の法名。
(二)西筑摩郡福島町。
(三)福島と上松との間。

の茶屋に入り、床几に腰うちかけて目を瞑ぐに、大地の動き、しばしは止まず。(一)蕉翁の石碑を拜みて、さゝやかなる橋の虹の如き上を渡るは、我が身も空中に浮ぶかと疑はれ、足の裏ひや〳〵と覺えて、強くもえ踏まず。通り來し方を見渡せば、此所ぞ棧の跡と思しきも、今は石を積固めたれば、固より往來の煩もなく、唯つた、かづらの力がましくはひまつはれるばかりぞ、古の面影なるべき。

昔たれ雲のゆききの跡つけて
わたしそめけん木曾の棧

上松(二)を過ぐれば、程もなく寢覺の里なり。寺に至りて案内を乞へば、小僧絶壁のきりぎはに立ち、遙かの上



寢覺の床

(一)松尾芭蕉の「かけはしや命をからむつたかづら」の句碑。

(二)長野縣上水内郡三輪村字上松。

を指さして、「此所は浦島太郎が龍宮より歸りて後に、釣を垂れし跡なり。川の直中に松の生ひたる大岩を寢覺の床岩、その上の祠を浦島堂とは申すなり。その傍に押立てたる岩を屏風岩、疊み上げたる岩、俎岩、釜岩、硯岩、烏帽子岩など申すなり。」と、いと殊勝氣にぞしやべりける。

誠や此所は天然の庭園にて、松青く、水清く、いづこの工匠か削り成しけん、岩石は峨々として高く低く、或は凹みて渦をなし、或は逼りて瀧をなす。いかさま仙人の住所とも覺えて尊し。

—獺祭書屋俳話—

一六　みとり日記

小林一茶(一)

享和元年四月二十三日　晴(二)

(一)江戸時代の俳人。名は彌太郎。信濃の人。文政十年(一八二七年)歿、年六十五。一茶句帳、七番日記、おらが春、三韓人等の著がある。

(二)二四六一年。

蓬が下の土

いかなればかゝるあさましき所にうつぶき給ふらんと抱き起し侍るに、蓬が下の土となり給ふ前表ならんと、後に思ひ知りたり。いかなる惡日にやありけん、些か心地惱ましうとなんありけるに、急に發熱さかんにして、膚は火にさはるが如くなれば、飯を勸むれども一箸も咽へ通らず。こはいかにと、ひとり驚き、魂を消すといへどもせんすべなく、唯揉みさするより外はなかりけり。

五月三日　晴

（匙）

迅磧は己がさじにては藥も得とゞかざる旨告げたりけるに、今まで神佛とも賴みし醫師にかく見はなさるゝ上は、祕法、佛力を借り、諸天應護のあはれみを請はんと思へども、宗法なりとて許さざれば、唯手を空しうして最期を待つより外はなかりけり。さてしも果てぬ事なれば、善光寺の醫師道有を招かまほしく、とみに人を走らせけり。今に玉の緒のあまりも、この度は元の人になり給へと、醫

玉の緒

師の來るをのみ待ちゐたりけるに、日入果てて門々に灯點す頃、やや駕籠の見えければ、とく病人を見しむるに、迅磧が言へる如く、萬に一つもこの世の人とは見えずとなん言はるゝ。今は賴むべき綱も切れて、唯湯水の咽に通ふを力に、夜の明くるを待ちたりけり。

四日

昨日にうちかはりて顏色うるはしく、何ぞたうべたきなど言はるゝに、嬉しさ限りなく、よべの藥の驗に親の蘇りたる心地して、かたくりなど練りて參らせけるに、椀に三つ四つすゝりこみ給ひき。道有も、この趣にて變の來らざれば、程なく快氣なるべしとなん言はるゝに、枕に附添ふ己もやゝ安堵の思をなしぬ。道有老歸り給ふに、古間の里まで見送り侍り。雨雲も西へ東へかたづきて、空の樣こなう珍しく、時鳥の初音をり得顏に告渡る。この鳥とくに啼きつらんに、父の異例の日より、日は日すがら、夜は夜すがら心を空にし

たうぶ

（一）今の長野縣上水内郡古間村。一茶の故郷柏原村の南方。

異例

て仕へまつれば、魂狂ふ事のみにして、聞きつるは今日始めての心地なりき。

時鳥われも氣あひのよき日なり

七日　晴

仙六は藥を請ひに善光寺へ行く。

夏の日のつれ〴〵におはしければ、「何ぞたうべたき。」と問ひ參らせたれども、穀のたぐひしか〴〵と好み給はねば、梨一つ參らせたく思へども、みすゞ刈る信濃の不自由なる我が里は、青葉がくれに雪の白々殘るばかり、野もせ、山もせ、夏尙寒き風の吹くのみなりき。梅賣る人の聲の門に聞ゆれば、青梅たうべたしとむづかり給へど、毒なりと參らせず。あはれ、何時の日か毒斷のなき人にして見まほしく心は騷げども、うつら〴〵と首重たげに見え給ふぞ、あぢきなき有樣なる。

(一)一茶の異母弟。
(二)今の上水内郡柏原村。
毒斷

十日　晴

頻りにありのみたうべたしとむづかり給へば、このあたりのゆかりあるもなきも、親しき限り富みたる家、心あたりある門、聞きつくし尋ね搜しつくすといへども、ありのみ一つ貯へたる人とてはなく、夏さへ寂しき山國なりき。今日は藥の絶間なれば、善光寺へ行かまほしく、曉にしたくして門を出でけるに、五月の空もほの〴〵晴れて、白雪はは山にあるからに、青葉がくれの花は春を殘して、種蒔の山人など懷かしく、時鳥の三聲一聲も、こよなく時めく空なるに、何となく心晴れぬ曙なりけり。卯の下刻、牟禮(一)てふ驛に至るに、こはそのかみ一茶江戸へ赴ける日、父の翁見送り給ひし里なりけるが、今は二十四年の昔となりき。川の音、坂の影もほのかに心おぼえありて、何となく嬉しけれど、人は知らぬ顏のみとなりけり。辰の刻ばかりに善光寺に著く。

時めくのあること

(一)今の上水内郡中郷村の字。柏原の南約八キロメートル。
(二)一茶と繼母との中が惡かつたので、父は家におくより、一茶を十四歲の時江戸へ奉公に出したのである。

抑、この地は御佛の淨土にしあれば、肆の軒を爭ひ、幌は風に飜り、入る人、出づる人、國々より遙々あゆみを運びて、未來の成佛を希はぬ人なかりき。己は今日父の命を受けて、御藥使はた梨を搜しに來つるなれば、天をかけり地をくゞりてなりとも梨一つ得まほしく、ある程の乾物店、ある程の青物店を、足を空にして駈巡るに、悲しさはさらに片われ一つありとさへ言ふ人はなかりき。昔(一)雪中に筍を掘り、氷(二)上に魚を求めしためしもあるに、我梨一つ得る能はざるは、皇天我を捨て給ふかや、佛神我を見限り給ふかや、一世ばかりの不幸にはあらじ。父はさぞ梨を待ち居給ふらん。このまゝに歸りて、父を何と慰めんと思へば、胸せき塞がりて、忍び落つる涙は大道を潤し、往き來の人の狂者と笑はんも恥づかしく、暫く手を組み首をうなだれて、心を靜めけり。この地になき物いづちにかあらん。唯一足も早く戻りて、藥ばし進め奉らんと、手を空しうして吉田(三)てふ里に

(一)二十四孝の一。人晉の孟宗の故事。孟宗の母が嚴冬に筍を請うたので孟宗は竹林に入つて哀泣したところ、雪中に筍が生じたといふ。

(二)二十四孝の一。人晉の王祥の故事。病母に生魚を請はれたが、時は冬にして河水が凍結してゐたので、衣服を脱ぎ氷上に坐したところ、氷が解けて二匹の鯉が躍り出たといふ。

(三)今の上水内郡吉田町。長野市の北方約二キロメートル。

來れるに、木立の山鴉三つ四つ我を見ては聲をたつるに、何となく父の身の上の心にかゝり、息もつぎあへず足をはやめし程に、日影八つ時といふ頃宿に戻る。父は何時よりも顏色うるはしく、笑を含み給ふに、梨を得ざりし事を語らばまたや氣色を失はん、とやせんかくやせんとためらふに、父の聞き給へば、ありのまゝを答へ、(一)高田へ參りて尋ね來り參らすべしと、白雲のよすがも知らぬ根なしごと申して、父をなだめ奉りしは、本意なき夕なりけらし。

(一)今の新潟縣高田市。柏原より北方約五十五キロメートル。

根なしごと

一七　芭蕉と一茶

(二)荻原井泉水

俳句が興つてから今日まで三百年、その間に最も輝いてゐる二俳人は芭蕉と一茶とである。世間もまたさう見てゐるらしい。しかし、何故にこの二人が俳句作者として代表的であるかと言ふに、芭蕉は自分の全人全心を以て俳句に向つた。彼は佳い句を作らうと

(二)俳人。名は藤吉。明治十七年東京市に生れた。句集及び觀音巡禮、京洛小品、芭蕉風景、山川行住等の著がある。

はせずに、唯正しく生きようとした。そして彼の生活が純になればなる程、彼の藝術としての俳句が醇になつて來たからである。一茶にあつては、彼といふ人とその俳句とがぴつたり一つである。彼の吐くその息がそのまゝ俳句になるかと思はれる程自然に、そして無造作に句作した。そしてその作が悉く一茶になつて躍動してゐるからである。私は思ふに、俳句は心の藝術である。または境地の藝術だと言つてもよい。俳句が唯表現として、言葉として、その對象を、或は意味を傳へるだけに止るならば、それは僅かに十七字の小さな藝術、否寧ろ纖細な工藝品に過ぎまい。俳句はいかに小さくとも、その作者の人間としての素質を、傾向を、そして自然に對する態度や觀照を、全的に盛つてゐるものであつてこそ、始めて一つの藝術として特殊な位置を占め得るものではないか。

そこで芭蕉の句と一茶の句とを較べて見ると、その風格でも、趣味でも、がらりと違ふ。それでゐて、どちらも本當の俳句に違ない。後世芭蕉を眞似てそれらしく作つた作が一向につまらなくて、芭蕉とは全く毛色も風味も違つた一茶が、俳人として芭蕉同樣に優れてゐるといふのは、面白い事である。これも俳句には、本來俳句といふ趣味があるのでなくて、俳句はその人の反映として光るといふ意味を語つてゐるものではないか。

芭蕉と一茶とは共に俳句をよく活したと言へる。俳句といふものは芭蕉以前から存在してゐたが、和歌の三十一字を折半した形だけに過ぎなかつた。それに精神を吹きこんだ者が芭蕉である。芭蕉去つて以後、俳句は芭蕉の模倣者に依つて盛んに弄ばれたが、精神のない骸（むくろ）だけのものになつてしまつた。それを再び新しい精神に於て活した者が一茶である。芭蕉と一茶とは僅かに百二十年を隔ててゐるだけであるが、一茶の句になると、芭蕉のそれとはすつ

淨財

かり變つて、時代的な心持になつてゐる。この差別は、この二人の素質の差である。芭蕉は人から施されて生活してゐたものだが、彼はもらつて食ふといふ事を、「めでたき人」の境遇だといふ風に考へてゐたらしい。賤しい乞食ではなくて、人から淨財を受ける高僧の風がある。金には目をくれぬといふ貴族的な所がある。で、芭蕉の句には、すべて彼の高貴な風格がにじみ出てゐる。その句の取材や言葉に於ては俗語を嫌はなかつたが、その趣味は非常に洗練されたもので、卽ち俗を去つて雅を磨いたのである。芭蕉が一句を作るのは容易な事ではない。推敲に推敲を重ねて出來るといふ風である。つまり俳句といふ小さな形が、芭蕉の作にあつては珠玉の如く見出されて、小さくて貴い物に位づけられたのである。これも俳句といふ小さな形を活す一つの正しい道であるに違ない。しかし、一茶の行き方はそれとはまるで違ふ。彼は芭蕉の樣に句作に苦しんだ風

象牙の塔

はない。敢へて風雅の道に向上しようなどとも心掛けない。唯思ふ所、感ずる所を言葉にしたそれが彼の日記で見ると、毎日數句づゝ何十年と作り續けてゐた。そしてかく容易に作られる物としては、俳句の樣に短い手輕な詩形でなければなるまい。この意味で、一茶は俳句といふものを、民衆的な、誰にでも出來る詩として活したのである。一體、一茶といふ人の素質からして、芭蕉の樣に高貴な所はない。彼は自ら「乞食の首領」などと文には書いてゐるが、彼には自分から好んで無所有の境涯に入る樣な氣持はない。物質的の欲情に就いては、世間一般の人の心持と大した差別がない。彼はどこまでも民衆中にあつて、民衆の聲を揚げてゐる。芭蕉は聖僧らしく、そこが芭蕉の偉い所であるが、ともすると、象牙の塔に隱れてしまひたがる。一茶はどこまでも下座に著いてゐるので、あぶなげがない。そしてすべての人の親しい友だちとなる。芭蕉風の俳句の行き方は

高踏的

坐禪辨道

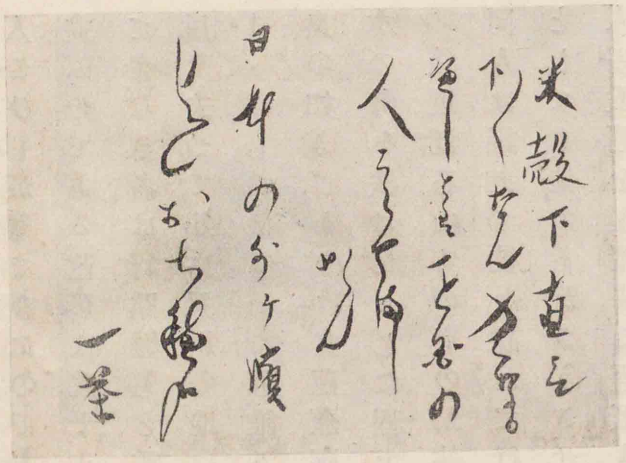
自力宗

高踏的である。少數の天分あり氣根ある人の達し得る所を目がけて進む。一茶流の俳句の行き方は民衆的である。萬人向である。誰にでも手が屆く。そして誰にでも親しまれるものである。この二人は別々の意味に於て俳句を活したのである。

芭蕉は句作には隨分苦しんだ。それは俳句の言葉を練る爲ではなく、それに依つて自分の心境を磨く爲に苦しんだのだ。佳い句を實らす爲には、心の木を佳くしなければならぬ故に。例へば、禪門の徒が一つの公案を含んで坐禪辨道をする樣に、彼は俳諧道の向上を以て、卽ち自己心境の向上に資したのである。これは自力宗の行き方である。一茶にあつての俳句は、芭蕉の樣に、そんなむづかしい物ではない。彼は幼少の頃の氣持を「われと來て遊べや親のない雀」と口誦んでゐる。無造作な、唯言はないでゐられない事を言ふ心持が、彼の死ぬまで俳句を詠ひ續けた心持である。彼にあつてその俳

米穀下直にて下々なんきなるへしとはこと國の人うらやましからん

日本の外ケ濱迄おち穂哉　一茶



一茶筆蹟

句は、或時は「悲しき玩具」でもあつたらう。或時は「寂しき杯」でもあつたらう。また俳句は彼の僞らざる獨言であつた。時には樂しい唄でさへもあつた。ともかく一茶にあつては、一日々々を生きて行く上に、俳句は缺くべからざるものだつた。この意味で、一茶もまた俳句を以て自分を活したと言へるが、俳句を以て自分をよくしようなどといふ自力的な事とはまるで違つてゐた。

芭蕉はみづから獨りを求めて、獨りの淸境に徹しようとした。死ぬまでさうだつた。一茶は五十二歲にして始めて結婚をしたが、生涯の

大部分は孤獨で暮した。彼は何時も他からひとりぼつちにされて、人こひしがつてゐたのである。その孤獨も、芭蕉と一茶とでは大分違ふのである。芭蕉は三十八歳の時「長安は古來名利の地、空手にして金なき者は行路難しと言ひけん人の賢く覺え侍り。」と言つて、江戸を去つて郊外深川の地に獨り隱れたが、門弟たちは彼を獨りのまゝにしては置かぬ程、誰々と代つて足繁く訪ねて來たり、また曾良の如きはわざ〳〵芭蕉庵の附近に家を借りて、日毎彼の爲に薪水の勞を扶けたりした程であつた。

薪水の勞

後、近江石山寺[一]の奥の幻住庵に隱栖した時も、大津膳所[二]あたりの同人は絶えず彼を訪ねて行つたらしい。彼がいかに獨りで居ようとしても、他の者がさうさせぬといふ風が見える。また彼とても門人の愛情を拒絶する程厭人的なのではない。嵯峨[三]日記を見ても、門人たちと膝を交へて物語つて居た日が多い。稀に「二十七日、人來ら

(一)滋賀縣滋賀郡石山村。隱栖
(二)滋賀郡大津の東南。
(三)一卷。嵯峨で落柿舍といふ所に閑居して居た時の日記。

ず、終日得閑。」などと書いてゐる。晩年に再び深川庵を修して住んだ時、「人來れば無用の辯あり、出でては他の家業を妨ぐるも憂し。」と言つて

幻住庵の芭蕉（荒井清次郎筆）

朝がほや晝は錠おろす門の垣

彼は「面會謝絶」と張出したわけでもあるまい、また親しい門下たちの來るのを喜ばなかつたのでもあるまいだが、有象無象の爲に閑をそがれる事を嫌つて、うは手に訪客御斷と申し出た。此所にも芭蕉の隱遁主義に個人的な高貴な味はひのある事が分る。

一茶の孤獨は、彼が好んで其所に就くのではなく、彼は三歳の時母を失つてから、いやでも孤獨の苦味を知らねばならなかつた。八

歳の時繼母が來た。義弟が生れた。それから彼は奴隷の様に子守と耕作の手傳とに追使はれた。「杖の憂き目を見ること、日に百度。」と、彼は追憶の日記に書いてゐる。

まゝつ子やすゞみ仕事に稟たゝく

彼が十四歳の時、父は一茶を繼母の許に置くに忍びなく思つて、江戸へ出した。彼の孤獨な放浪生活は、その時から三十年餘りも續いた。四十八歳の時、故郷の土を懷かしく思つて戻つて來たが、繼母と義弟とが餘りに專横な仕業をするので、「故郷やよるもさはるも茨の花」と吟じて、草鞋も解かずに去つてしまつた。その後和解が成立して、始めて故郷に落著く事が出來、妻をも娶つたが、その妻には死なれた。次に後妻をもらつたけれども、直ちに離別してしまつた。

小言いふ相手もあらばけふの月

これは六十一歳の時、先妻に死なれた年の作と見える。五十を過ぎてから漸くさゝやかな幸福を握つたかと思ふと、その幸福にも逃げられて、やつぱり寂しい自分の孤獨を見出さねばならなかつた。

野人一茶（高山完筆）

彼には故郷なる柏原の近郷に親しい門人が數名あつた。彼の日記で見ると、庵にゐるよりも、門人の家をちよこまかと歴訪して歩いて居た日の方が多い。それは寂しくてたまらないので、また來たぞといふ風である。そして彼は門人たちに嫌はれたわけではないが、晩年にはその門人たちの間に暗鬪があつたといふ話だから、面白くなかつたかも知れぬ。彼は門人と同行する事などは稀で、何時も獨りでぽく〳〵と寂しく歩いて居た様である。一茶の孤獨は、芭蕉のそれの様に自主

的な好尚ではない。他動的な「據所なきもの」で、言はば運命的なものであつた。言換へると、一茶は芭蕉に見る如き隱遁主義の人ではない。一茶はどこまでも俗世間に交り、一個の平凡な人間として生きようとした。そしてこの萬人の味はふべき人生の姿を、自分の言葉をもつて詠つたのである。かうした所に生粹な民衆作者としての一茶の面影がある。

ともかく芭蕉にあつても、一茶にあつても、その人として渾然たる境地に入つた所が、その人の藝術として圓熟した味はひを出した所である。俳句は決して文字の小技ではない。心境の藝術である。芭蕉が詠へば芭蕉として活き、一茶が吟ずれば一茶として活きる。それにしてもこの二人は俳句藝術のそれ〴〵に趨るべき二つの極點を暗示する。若しくは俳句藝術のそれ〴〵に流れ出た二つの發足點を明らかにするものである。

一八　鄉土の魅力

相馬御風[一]

鄉土といふものの人間の心を引附ける作用は、今更ながら不思議なものである。一方に「月日は百代の過客にして、行交ふ年もまた旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を棲所とす。古人も多く旅に死せるあり。余も何れの年よりか片雲の風にさそはれて、漂泊の思やまず。」と言ひ、或は「羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なんこれ天の命なり。」などと言つてゐたかの芭蕉翁でさへ、他方に於ては

「代々の賢き人々も故鄉は忘れ難きものにおもほえ侍る由。我、今は初の老も四とせ過ぎて、何事につけても昔の懷かしきまゝに、はらからのあまた齡傾きて侍るも見捨難くて、初冬の空のうち時雨るゝ頃より、雪を重ね霜を經て、師走の末、伊陽の山中に至る。

羈旅

(一) 詩人、評論家。名は昌治。明治十六年新潟縣に生れた。御風詩集、黎明期の文學、野を少む者、一茶と良寛と芭蕉、鄉土に語る等の著がある。

なほ父母のいまそかりせばと、慈愛の昔も悲しく、思ふ事のみあ
またありて、
ふるさとや臍の緒に泣く年の暮」
などと言つてゐる。
ふるさとは蠅まで人をさしにけり
ふるさとは西も東もばらの花
といつた風に、永い間自分の故郷を詛つて、旅から旅へと漂泊して
居た、あのすね者の俳諧寺の一茶ですら、晩年には
これがまあつひの棲所か雪五尺
などと驚きながらも、その雪の深い信州柏原の郷里に歸り住んで、
其所で一生を終へた。
更にかの近世稀有の聖僧と言はれる越後の良寛和尚の如きも、
二十二歲から四十三歲までの二十餘年間の雲水行脚の旅にあき

たらないで、それ以來ずつと越後の鄉里に孤獨な庵住生活を續け
て、靜かな往生を遂げてゐる。
ふるさとへ行く人あらばことづてん
けふ近江路をわれ越えにきと
草まくら夜ごとにむすぶやどりにも
むすぶは同じふるさとのゆめ
などといふ彼の旅中の歌を讀んでも、いかに彼が故鄉を慕ふ思の
切なものであつたかを察する事が出來る。二十三歲で妻子を振捨
てて佛門に歸し、諸國修行の旅に出た西行も、
柴の庵のしばし都へかへらじと
おもはんだにもあはれなるべし
世の中を捨てて捨てえぬ心地して
みやこ離れぬわが身なりけり

などと歌つて居り、且晩年には都に歸つて死んだ。

かう言つた風に、昔から代表的な漂泊の人々として知られたこれ等脱俗の人すらも、不思議に彼等の生れ且育てられた鄉土に對しては、しかく切な愛慕の情をもつて居た。抑、この鄉土の人間に對してもつてゐる魅力は、どこから來るのであらうか。

抑、鄉土が私たちの心を引附ける點は、どういふ所であるか。その地の自然が、他の何れの土地よりも風景の美に於て優れてゐる爲かと言ふと、必ずしもさうではない。人情が特に他の何れの土地のそれよりも醇美である爲かと言ふに、それも然りとは言へない場合が少くない。それでは何か特別に自分の生活に都合のいゝ外的條件がある爲かと言ふに、それも必ずしもさうばかりとは言へない。さうかと言つて私たちは、理智的に考へて、故鄉といふものは大切なものだと明白に判斷してから後に、故鄉を慕つてゐるとは尙

醇美

理智的

更考へられない。

功利的見地

然らば、人々は何故に自分の鄉土といふものに心を引かれるのか。それは全く「何とはなしに」である。理智的判斷によるのでもなく、功利的見地からでもなく、或は特に美的判斷が然らしめるといふのでもなく、それは唯「何とはなしに」である。鄉土の人心を引附ける魅力は、實にこの何とも言つて見やうのない所から發する。それは自然と人間と、過去と現在とを一つに融した一種不思議な音樂的な、詩的な魅力である。また私たちが鄉土を慕ふ心は、全く自分にもよく分らない內心自發の情緒である。いかなる力を以てしても否定し難い本然的情緒である。この不可思議な情緒の存在してゐる事實は、恐らくいかなる理智の人と雖も、否定する事は出來ないであらう。

本然的情緒

けれども、今の時代には、追々この自分の鄉土といふものを失ひ

つゝある人が多くなりつゝある事も、また明らかな事實である。

私は曾て、漁夫に取つて海は單に彼等に生計の資を與へる爲のみの場所でなくして、また實に彼等に取つての貴い心の糧を與へる領土であるといふ樣な事を書いた事がある。全く漁師程海を愛する事の切な者はない。それは海は彼等に取つては離れ難い心の世界である。農夫に取つて山野田畑が單に彼等の生計の資を得る場所でないと同じである。

外に愛慕すべき鄉土を失ふ事は、同時に內に心靈の故鄉を失ふ事である。漁師に取つて、海は單に生計の資を得るのみの場所と考へられる時、漁師は卽ち心の故鄉を失ふのである。農夫が山野田畑を生活の爲の資を得る場所とのみ考へる時、農夫は心靈の鄉土を失ふのである。

西洋の或新しい女の哲學者の書いた物の中に、こんな一節があ

つた。

「ロシヤとの戰爭中、粗末な米の飯を有難がつてゐた日本の兵士は、何かの機會に僅かばかりの草花でも見ると、ヨーロッパの遠足家のそれにもまして、一種の精神的更新を感得したといふ事である。一體、ヨーロッパの遠足家は、無慈悲にも自然の最も美しい春の著物である所の草花を汚したり、樣々の樹木や記念物を傷つけたり、卓子や椅子などにまで容赦なく自分のつまらない名前などを彫りつけたりなどして、彼等自身を樂しませてゐる輩である。」

私たちは一般のヨーロッパ人が、それ程自然を愛し得ない人たちであるかどうかの事實を知らない。しかし、私たち日本人が一般に自然を愛する切な心をもつた民族である事實は、信じて疑はない。自然は何と言つても私たちの心の故鄉である。脚氣患者が鄉里に

歸る事によつて、何時とはなしに健康を恢復する事が出來る樣に、私たちの傷ついた心は、魂は、心の底から自然を愛し、自然を懷かしむ事によつて、その健康を取戻す事が出來る。

自然を魂の鄕土として懷かしむ事の出來る幸福を、私たちは永遠に失ひたくない。私たちは自分にも、また自分の子どもたちにも、永遠に「鄕土」の有する魅力を失はせたくはない。それは私たちの爲の搖籃であつて、また墳墓であるべきである。

——對山雜記——

自修文

海を思ふ

中村孝也[1]

夏になると海を思ふ。蒼い色、白い浪、日は照映えて、爽涼の氣が溢れる。

我等の祖先は海の兒であつた。海は自由の世界である。我等の祖先は自由の兒であつた。

(一)歴史家、文學博士。史料編纂官兼東京帝國大學助教授。明治十八年群馬縣に生れた。しら菊、英俊傳、源九郎義經等の著がある。

爽涼　さわやかですすしいこと。

北より南より、大陸より南洋より、彼等は美しい群島に集り來つた者であつた。小さな舟を操つて、萬里の波濤を越えた彼等の勇敢な氣象は、眞に讃すべきかな。

海は活動の世界である。彼等は實に活動の兒であつた。

風は動き、雲は動き、浪は動き、人もまた動く。彼等の航海は、思へば、奇しきものであつた事であらう。

故鄕の山は淡い靄の裡に包まれて、次第に遠く消えてしまふ。軟風が輕く額を吹く。綱具は鳴る。帆布は張る。舟はたゆたに搖ぎながら、朝日の直中を進んで行く。日輪は昇る。浪は黃金を溶した樣に輝く。日輪は退く。殘光漸く褪せて、黃昏の紫の裳裾がおもむろに海原を蔽ふ。數多の星は水線の上に浮び出て、燦らかに大空の旅路にのぼる。

月一輪、高浪の峰を傳うて、ひた走りに走る。

美しい群島　日本のこと。

奇しきもの　奇態なもの。

軟風　そよ〳〵と吹く風。

綱具　綱と結合した滑車。

たゆたに　ゆらり〳〵と。

殘光　夕映。

水線　水平線。

ひた走り　一すぢに走ること。

光景は刹那々々に變る。美しき幻影は髣髴として斷えず行く手に馳せる。その神に導かれて、舟もまた馳せる。人は皆つぶやく、「あはれ女神よ。いづこまでも慕ひ行かん、御袂にすがり參らするまでは。」と。

あこがれは誠となつた。美しき群島は、にこやかに彼等を迎へた。彼等は悅んで山に木こり、水にすなどり、廣野をたがやし、歌ひつゝ、踊りつゝ、その生活を樂しんだ。そして何時とはなしに、故郷の記憶は消えてしまつたのであつた。

それより後幾千年。忘れられた故郷の思出よ。さは言ふものの、子孫の夢は、見ぬ世の姿に淡々として彩られて、春風秋雨、海のあなたを思ひ懷かしむのであつた。遠く逝きにし母の乳房の慕はしさ。

その神　「美しき幻影」をさす。

見ぬ世の姿に云々　見知らぬ故郷、それを慕ふ夢の樣な懷かしさが潛在意識となつて、何と言ふ事なしに海がこひしく思はれるの意。

遠く逝きにし母の云々　海のあなたを思ひ懷かしむ感情は、丁度早く別した母の乳房のそのはつきりした記憶とてはなしが、何とはなしにその氣持と通ずるものがあるとの意。

それは甘く、快い慕はしさである。眼は何時も海のあなたに向ふ。海のあなたには白い花がほゝゑむ。その花には夢の匂がある。何やらの懷かしさ。

往かばや、あなたに、遠く海を越えて。風は動き、雲は動き、涙は動き、人もまた動く。海は自由の世界である。活動の世界である。光明と希望との世界である。悠久の存在、永遠の生命の世界である。

夏になると何時も海を思ふ。蒼い涙、白い帆。月は美しく照映えて、爽涼の氣が快く流れる。

夢の匂　夢の樣な慕はしさ。

一九　芳流閣上の血戰

瀧澤馬琴(一)

古の人言はずや、禍福(二)はあざなへる繩の如し。人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。」そは福(三)の倚る所、はた禍の伏する所、彼にあれば此にあり。とは思へども豫てより、誰かよくその極を知らん。憐むべし犬塚信乃は、親の遺言、記念の名刀、心に占めつ、身につけつ、

(一)江戸時代の小説の大家。江戸の人。嘉永元年（二五〇八年）歿、八十二。南總里見八犬傳、椿説弓張月等の著がある。

(二)禍之ノ與レ福ハ分ル何異ニ糾纆ナランヤ。（漢書、賈誼傳）

塞翁が馬　(三)禍ハ分福之所レ倚。福ハ分禍之所レ伏。孰知ニ其極ヲ。（老子）

(一)下總國(茨城縣)古河。

(搦)
(愁)

艱苦のうちに年を經て、得難き時を得てしかば、遙々滸(一)我へもたらして、名を揚げ家を興すべかりし、その福は禍と、ふりかはりたる村雨の、刃はもとの物ならで、我が身をつんざく讐とぞなりし、憾を茲に釋く由もなく、事急にして意外にあり。僅かに當座の辱を避けばやと思ふばかりに、あまたの圍を切開きて、芳流閣の屋の上に、攀登れどもとにかくに、脱れ去るべき道のなければ、其所に必死をきはめたる、心のうちはいかなりけん、思ひ遣るだにいと傷ましし。

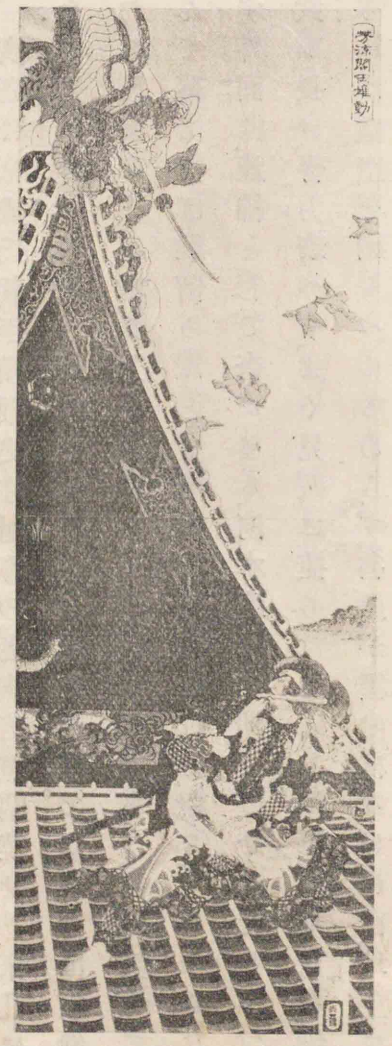
瀧澤馬琴

されば、また犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月來獄舍に繫がれし、禍は今恩赦の福。我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役儀、「犬塚信乃をからめよ。」とて、なまじひに擇み出されつ、他の憂を身の面目に、今更用ひられん事、願はしか

身を霞ませて

(一)利根川の異稱。

らずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ、君命重く、彌高き、かの樓閣は三層なり。その二層なる檐の上まで、身を霞ませて登りて見れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく堪難き、頃は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸のほてりを渡る敷瓦は、凸凹隙なく波濤に似て、下には大河滔々たる、此所生死の海に入る、流は名に負ふ坂東太郎、水際の小舟楫緒絶えて、進退既に谷りし、敵にしあればいかで我、繫ぎ留


芳流閣上の血戰（月岡芳年筆）

（鼠）

めんとむさゝびの樹傳ふ如くさら〳〵と、登り果てたる三層の屋根にはまぶしさす由もなく、かたみに隙を窺ひつゝ、睨まへあうて立つたる有様、浮圖の上なる鶴の巣を、巨蛇の狙ふに似たりけり。

廣庭には成氏朝臣(一)、横堀史在村等の、老黨若黨圍繞せし、床几に腰をうちかけて、勝負いかにと見上げたり。また閣の東西には、腹卷したる許多の士卒、槍、長刀をきらめかし、或は矢を負ひ、弓杖突立て、組んで落ちなば擊留めんとて、項を反してこれを觀る。しかのみならず外面は、連綿として杳かなる、河水遶りて砌を浸せば、たとひ信乃武事長け、膂力衰へず、よく見八に捷ちたりとも、墨氏(三)が飛鳶を借らざれば、虚空を翔るべくもあらず。魯般(四)が雲の梯なければ、地上に下るべくもあらず。かれ鳥ならずも羅に入りぬ、獸ならずも狩場にあり。三寸息絶ゆれば、事皆やまん。脱れ果てじと見えたりけり。

その時信乃思ふ様、初層、二層の屋の上まで、追登らんとせし兵等

(一)足利持氏の子。鎌倉の管領。
(二)管領足利氏の執權職。
(三)支那周代の哲學者。名は翟。
(四)姓は公輸、名は般。魯の人。巧に機械を作つた。

を、斬落しつる後は、絶えて近づく者もなきに、今唯獨り登り來ぬるは、世に覺ある力士ならん。しやつはこれ膳臣巴提便(一)が、虎を暴にせる勇あるか、また富田の三郎(二)が、鹿の角を裂ける力あるか。さもあらばあれ一人の敵なり。引組んで刺違へ、死するに難き事やはある。よき敵にこそござんなれ。目に物見せんと血刀を、袴の稜もて推拭ひ、高瀬の如きはこ棟に、立つたるまゝに寄するを待てば、見八もまた思ふ様、「かの犬塚が武藝勇悍、素より萬夫無當の敵なり。さりとてもからめかねて、他の援を借る事あらば、獄舍の中よりこの役儀に、擇み出されしかひもなし。からめ捕るとも擊たるゝとも、勝負を一時に決せんものを。」と、思ひにければちつとも擬議せず、「御諚ざふ。」と呼びかけて、持つたる十手を閃かし、飛ぶが如くにはこ棟の、左の方より進み登りて、組まんとすれども寄せつけず。「心得たり。」と鋭き太刀風に、擊つをはつしと受留めて、拂へばすかさずこむ刀尖を、支へて

(一)第二十九代欽明天皇の朝百濟に使し、雪夜幼兒の虎に食はれたのを憤り、虎穴をさぐつて虎を獲た人。（遮莫）
(二)和田義盛の臣。將軍實朝の前で二箇の大鹿角を重ねて折つた。

擬議

一上一下
手練
見る目遙か
錚然
ていたらく

流す一上一下、滑るいらかを踏止めて、頻りに進む捕手の祕術、彼方も劣らぬ手練の働、嵩より落す太刀筋を、あちこち外す虚々實々、未だ勝負をわかざれば、廣庭なる主從士卒は、手に汗握らざるもなく、瞬もせず氣を籠めて、見る目もいとゞ遙かなり。

さる程に犬塚信乃は、侮り難き見八が、武藝に敵を得たりけりと、思へば勇氣彌增して、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音、掛聲。兩虎深山に挑む時、錚然として風發り、二龍青潭に鬪ふ時、沛然として雲起るも、かくぞあるべき。春ならば峰の霞か、夏ならば夕の虹かと見るばかりなる、いと高き閣の棟にして、死を爭ひしていたらく、世に未曾有の晴業なれば、見八は被籠の鎖肱當のはづれを、裏かくまでに切裂かれしかど、太刀を拔かず。信乃は刀の刃も續かで、初に淺痍を負ひしより、次第に痛みを覺ゆれども、足場を計りて撓まず、去らず、疊みかけて擊つ太刀を、見八右手に受流して、返す拳に

（鍔）
（捩）
覆車

附入りつゝ、やつとかけたる聲と共に、眉間を望みてはたと打つ、十手をちやうと受留むる、信乃が刃はつば際より、折れて遙かに飛失せつ。見八得たりとむんずと組むを、そがまゝ左手に引著けて、迭に利腕しかと取り、ねぢ倒さんと曳聲合せて、揉みつ揉まるゝ力足、これかれ齊しく踏滑らして、河邊の方へころ〳〵と、身をまろばせし覆車の俵、坂より落すに異ならず。勾配險しきかけづくりに、削り成したるいらかの勢、止るべくもあらざめれど、迭に取つたる拳を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙かなる河水の、底には入らで程もよし、水際に繫げる小舟の中へ、うち累りつゝどうと落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音する水煙、纜ちやうと張切つて、射る矢の如き早河の、眞中へ吐出されつ。しかも追風と引く潮に、さそふ水なる下り舟、行方も知らずなりにけり。

――南總里見八犬傳――

(一)歌人。本姓名は久保田俊彦。長野縣の人。大正十五年歿、年五十。

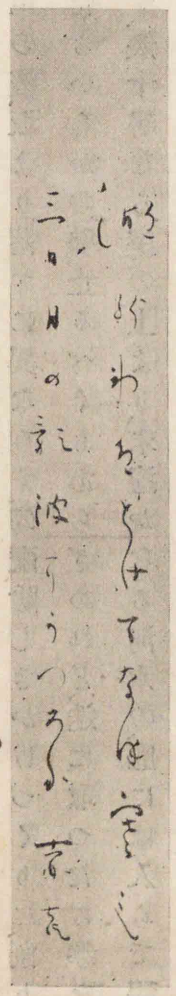
湖の氷はとけてなほ寒し三日月の影波にうつらふ　赤彦

(二)歌人。名は繁。宮崎縣の人。昭和三年歿、年四十四。

(三)歌人。名は雄太郎。明治十年東京市に生れた。

二〇　天地の心

高槻のこずゑにありて頬白のさへづる春となりにけるかも　島木赤彦



島木赤彦筆蹟

うすべにに葉はいちはやくもえ出でて咲かんとすなり山ざくら花　若山牧水

牛のゆく白河路の水ぐるまかたりことりといとまあるかな　金子薫園

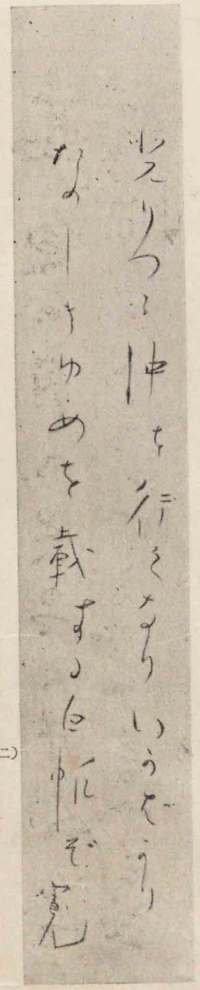
(一)歌人、書家。名は三郎。明治十年東京市に生れた。

光りつゝ沖を行くなりいかばかりたのしきゆめを載する白帆ぞ　寛

(二)歌人。慶應大學教授。明治六年京都市に生れた。

(三)歌人。名は洋三。明治十六年神奈川縣に生れた。

葉ざくらの葉だりの露の朝じめり山吹草の花咲きにけり　岡麓



與謝野寛筆蹟

鳴きに鳴くあさまし長しかしがましみじかき歌をしらぬ蟬かな　與謝野寛

まひる日のあきらかにてれる山原は大いたどりの花さかりなり　前田夕暮

(一)歌人、小説家。茨城縣の人。大正四年歿、年三十七。

(二)歌人。明治二十二年廣島縣に生れた。

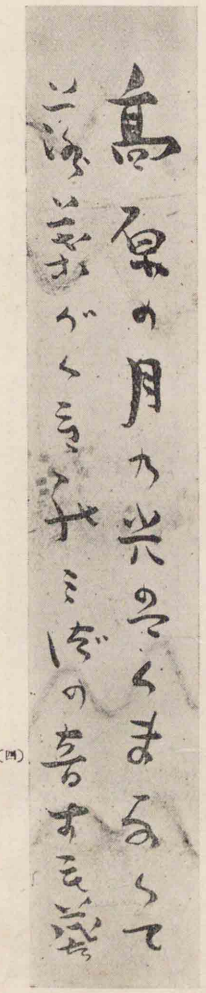
高原の月の光はくまなくて落葉がくれのみづの音すも　茂吉

(三)歌人。醫學博士。明治十五年山形縣に生れた。

(四)歌人、書家、國文學者。文學博士。柴舟と號する。東京女子高等師範學校教授。明治九年岡山縣に生れた。

たらちねの母がつりたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども　長塚節(一)

夏山をめぐり疲れて日暮がたとなりの國の出雲へくだる　中村憲吉(二)



齋藤茂吉筆蹟

しづかなるたうげをのぼりこし時に月の光は八谷をてらす　齋藤茂吉(四)

尾上八郎

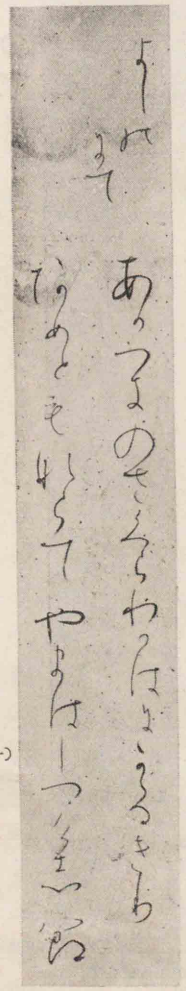
よしのにてあかつきのさくらわかはにかゝるきりあめともならてやまはしつけし　八郎

(一)歌人、國文學者。文學博士。明治五年三重縣に生れた。

しきしまのやまとの國をつくり成す一人と我ををしまさらめや　信綱

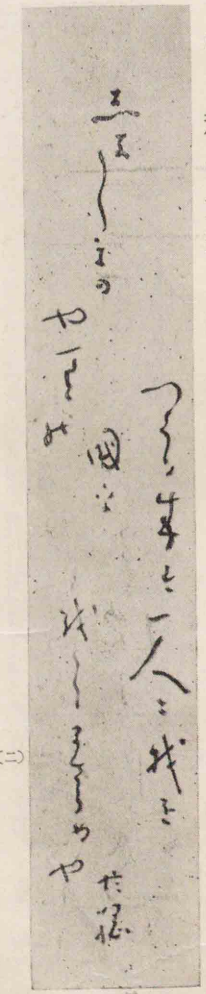
(二)歌人。名は幾多郎。千葉縣の人。昭和三年歿、年四十三。

しづやかに月は照りたりあめつちの心とこしへ動かぬがごと　佐々木信綱(一)



尾上八郎筆蹟

ゆく秋の大和の國の藥師寺の塔の上なる一ひらの雲　古泉千樫(二)



佐々木信綱筆蹟

目の前に五百重おきふす雪の山しづかなるかな鷹ひとつかける

(一)歌人、詩人。名は隆吉。明治十八年福岡縣に生れた。

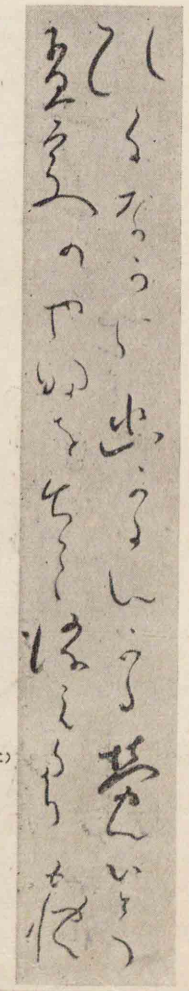
ひるながら幽かにひかる螢ひとつ孟夏のやぶを出でて消えたり　白秋

(二)歌人。千葉縣の人。大正二年歿。年五十。

天地のよもの寄合を垣にせる九十九里のはまに玉拾ひ居り　左千夫

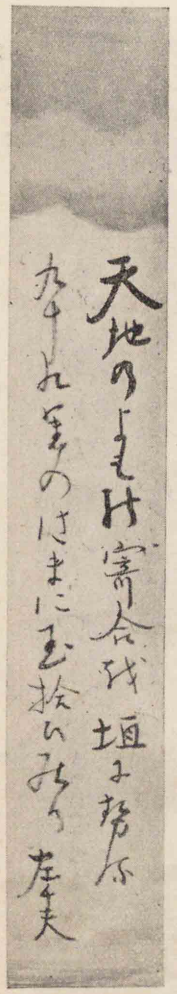
(三)歌人、國文學者。宮城縣の人。明治三十六年歿。年四十二。

松原のしぐるゝ寺の前どほりとほる人はあれど日の暮のかげ　北原白秋(一)



北原白秋筆蹟

みぎひだり背によりつくを負ひなめて笑あふるゝ眞晝の家に　伊藤左千夫(二)



伊藤左千夫筆蹟

落合直文(三)

(一)第六十代醍醐天皇の皇孫。天元三年(一六四〇年)歿、年六十三。

(二)克明親王。管絃の道

(三)第六十二代村上天皇。

(四)山城(京都府)と近江(滋賀縣)との國境。

(五)第五十九代宇多天皇の第八皇子。

あながちに好む

一つもて君をいはゝん一つもて親をいはゝん二もとある松

二一　流泉啄木

今は昔、源博雅(一)朝臣といふ人ありけり。延喜の御子の兵部卿(二)の親王と申す人の子なり。よろづの事にすぐれてありける中にも、管絃の道になんいみじかりける。琵琶をも微妙に彈きけり。笛をもえならず吹きけり。この人、村上(三)の御時に四位の殿上人にてありけり。その時に逢坂(四)の關に一人の盲、庵を造りて住みけり。名をば蟬丸とぞ言ひける。これは敦實と申しける式部卿の宮の雜色にてなんありける。その宮は宇多天皇の御子にて、管絃の道にいみじかりける人なり。年ごろ琵琶を彈き給ひけるを常に聞きて、蟬丸、琵琶をなん微妙に彈く。然る間、この博雅、この道をあながちに好みて求めけるに、

流泉啄木

齋藤弓弦筆

かの逢坂の關の盲、琵琶の上手なる由を聞きて、かの琵琶を極めて聞かまほしく思ひけれども、盲の家異樣なれば行かずして、人をもてうち〳〵に蟬丸に言はせける樣、「など思ひかけぬ所には住むぞ。京に來ても住めかし。」と。盲これを聞きて、その答をばせずしていはく、

世の中はとてもかくてもすごしてん
みやもわらやもはてしなければ

と。使歸りてこの由を語りければ、博雅これを聞きて、いみじく心にくゝ覺えて、心に思ふ樣、「われあながちにこの道を好むによりて、必ずこの盲に會はんと思ふ心深し。それに盲命あらん事も難し。また我が命も知り難し。琵琶に流泉、啄木といふ曲あり。これは世に絶えぬべき事なり。只この盲のみこそこれを知りたるなれ。構へてこれが彈くを聞かん。」と思ひて、夜かの逢坂の關に行きにけり。然れども

蟬丸その曲を彈く事なかりければ、その後三年の間、夜々逢坂の盲が庵の邊に行きて、その曲を今や彈く〳〵と竊かに立聞きけれども、更に彈かざりけるに、三年といふ八月の十五日の夜、月少しうはぐもりて、風少しうち吹きたりけるに、博雅、あはれ今夜は興あり。逢坂の盲今夜こそ流泉、啄木は彈くらめと思ひて、逢坂に行きて立聞きけるに、盲琵琶をかき鳴して、もの哀に思へる氣色なり。博雅これを極めて嬉しく思ひて聞く程に、盲獨り心をやりて詠じていはく、

蟬丸（案本一洋筆）

あふさかの關のあらしのはげしきに

數寄者

しひてぞゐたるよをすごすとて

とて琵琶を鳴すに、博雅これを聞きて、涙を流して、哀と思ふ事限りなし。盲獨言にいはく、「あはれ興ある夜かな。若し我にあらぬ數寄者や世にあらん。今夜心得たらん人の來よかし、物語せん。」と言ふを、博雅聞きて音を出して、「王城にある博雅といふ者こそ此に來たれ。」と言ひければ、盲のいはく、「かく申すは誰にかおはする。」と。博雅のいはく、「我はしか〳〵の人なり。あながちにこの道を好むによりて、この三年この庵の邊に來つるに、幸に今夜汝に會ひぬ。」盲これを聞きて喜ぶ。その時に博雅も喜びながら庵の内に入りて、かたみに物語などして、博雅「流泉、啄木の手を聞かん。」と言ふ。盲「故宮はかくなん彈き給ひし。」とて、件の手を博雅に傳へてけり。博雅、琵琶を具せざりければ、只口傳をもてこれを習ひて、返す〳〵喜びて、曉に歸りにけり。これを思ふに、諸の道は只この如く好むべきなり。それに近代はげに然らず。然れば末代には諸道に達者は少きなり。げにこれあはれなる事なりかし。蟬丸賤しき者なりといへども、年ごろ宮の彈き給ひける琵琶を聞きて、極めたる上手にてありけるなり。それが盲になりにければ、逢坂にはゐたるなりけり。それより後、盲の琵琶は世に始れるなりとなん語り傳へたるとや。

（今昔物語に據る）

二二　美しき故國

矢代幸雄[一]

五年目の秋を日本に迎へて、忘れた者に再び出逢つて珍しくてしやうのない樣に、日本の秋は美しいなと思ひました。平野にはまだ夏の名殘が暑く溜つてゐる九月初に、昔行きつけた蘆[三]の湯へ登つて行きました。薄が見たかつたからです。湯の花澤へかけての高原を秋風が渡つて、銀綠の細長い薄の葉は、貫[四]之の草書の亂れがきは、かうもあらうかとばかり波打つてゐました。湯の宿に滯留して

(一) 畫家、評論家。東京美術學校教授。明治二十三年横濱市に生れた。太陽を墓ふ者の著がある。
(二) 箱根山中にある。
(三) 蘆の湯から約一キロメートル半。
(四) 紀貫之。

ゐるうちに、目に見えて秋が惜しくなつて行きました。今日は寒いと思つて高原へ出ると、高原の銀色は見違へる樣にさえて來ました。此所に高原の銀色といふのは、私の好きな薄原の事です。絹絲の樣な穗の藤紫から紅が褪せて、凄愴としてさえた光がまさつて來たのです。其所に秋風が波打たせてゐました。

凄愴

日本は綺麗な國だと思ふのです。日本を褒める爲に外國を惡く言ふ氣はいたしません。唯日本は本當に綺麗な國でした。去年の秋はイギリス、一昨年の秋はイタリー、その前の秋はスウィスからドイツを通つてイタリーに歸る、もう一つ前の秋はフランス、スペインを遊び過ぎて、秋ももう深い頃イタリーに歸つた。自然はどこも美しい。秋の空が時雨れても、初冬の空がからりと晴れても、國々にその國特有な美しさがある。でも日本の秋――それはまた無上に綺麗です。

秋ばかりではありません、日本の春も殊にさうです。今年は京都から中國、九州へと旅して見ました。櫻の花と菜種の花とが到る所滿開でした。菜種が野を黃色くだんだら縞にすると、櫻は山を鹿子斑にします。土佐繪の夢です。よく古土佐の繪卷物には、――例へば、ねざめ物語(一)繪卷の見返に、一面に櫻の花が咲いてゐます。細い枝と幹との星の樣な花が、一面にみんなこちらを向いて咲いてゐます。をかしい程花だらけです。あれを美術の學者は、日本畫に於ける自然の圖案化、裝飾化と言ひます。いゝえ、そんな人間の勝手に工夫したものではありません。あれが日本の自然の相(すがた)、それのすなほな日本人の心への印象です。久しぶりに日本の春を歩いて、私は古土佐

ねざめ物語繪卷の見返

(一)今殘缺一卷。秋元子爵家の藏。筆者、製作年代共に不詳。

の繪卷物の國を歩くと言つた樣に、華やかに、そして寂しく浮れました。

それから秋。秋と言へば、この間また平家の嚴島へ納めた經卷(一)を見ました。あれは銀の藝術です。金光眩い佛畫の彩色から、王朝時代の莊嚴藝術が生れる。金莊嚴が洗はれ白く練れて艶麗となり、纖巧となり、遂に銀色の涼しい夢となる。嚴島經卷を見ながら、私は華麗な神經質の王朝の秋を見た樣な心地がしました。日本の秋の一相が確かに其所にある。經卷の中勸持品でありましたか、料紙裏に、銀地に群青色の桔梗の花が、小さい星の樣に寂しさうに描いてありました。銀河に明るい秋の夜に、見えない小さい星を懷かしむ、それともまた萩薄にしつとりと置かれた白露の圖と言ひませうか。歐洲の秋の野に銀の光の露の面白さを私は知りません。あちらの牧場はいち早く刈られて、枝垂れ靡く草の葉がないからでせうか。牧

(一)長寛二年（一八二四年）夏の末に奉納。三十三卷。

畜が盛んで、おいしい草は刈られないうちに、もう放牧の牛と羊とに根本まで綺麗に食べられてしまふのですもの。西洋の草場は遠見が毛氈を敷いた樣に綺麗なだけです。運動場の芝生の通りです。

日本の秋の野は曲線模樣です。もの狂はしい旋律です。また薄の事を言出しますが、武藏野は土壤の肥えてゐるせゐか、大きな、作つた樣な薄が、よく大根畑にはさまつて生えてゐます。私の住む大森から池上(一)馬込(二)の方へかけては、新開地の家の建ちかけた空地に、思ひがけなく昔の武藏野の形見かと思はれる程立派な薄が、縱横に曲線幻想を逞しうしてゐる事があります。秋の午後にありがちな、無風の寂滅と言つ

すゝき（安田杉溪筆）

(一)(二)共に東京府荏原郡。

た様な靜かな光の中に、幻想の薄はこの世ならぬ淨光その物になります。のどやかな日影は長い葉を銀條に、長い穗を金絲に輝かして、金銀の豪奢な花火を落日の前に揚げ、そして寂しくなつてゐる様です。

其所に、いつそのこと月があれば(一)と想像するのは、私の心が武藏野の秋の薄の記憶から、何時の間にか宗達の繪模様の中を歩いてゐるせゐでせう。宗達はその師光悅(二)が新古今の歌を書きつける卷物の料紙に、金銀泥で四季の花と草とを思ふさまに描いた事があります。名筆を懷かしんで卷物を繰つて行くと、藤、つゝじの咲く夏景色から、繪卷が秋に入つて行く。萩原から薄原、大きな薄が秋一杯に亂れたかと思ふと、一卷の中心點の樣に、ぽかつと大きな月が、薄の向ふに、薄模樣を著ながら浮びましたぱか〳〵しい樣です。お伽話の月よりも不思議です。繪模樣の國ならこそあんなに美しい月

(一)野村宗達。畫家。能登の人。俵屋と稱した。古土佐の風を一派をなした。寛永(二二八四—二三〇三年)頃の人。
(二)本阿彌光悅。畫家、書家。また刀劍鑑定家。寛永十四年(二二九七年)歿、年八十一。

が出る。——薄の美しさ。それは風に靡く風情をのみ昔から歌はれます。高原に雲垂れて蕭條として靡く薄は、確かに詩人を泣かせますけれども、無風に寂光に浸つて曲線の迷走を肆にする薄も、また一つの夢の花です。亂れた詩想の收め樣もない耽美です。

西洋の景色が、西洋の食物の樣に、どこか大味の樣な氣のするのは私だけでせうか。スウィスは綺麗だけれども、掃除した樣な綺麗さです。イギリスの田舍は平遠閑雅、綠蔭に清流緩やかにめぐつて、丁度うまく白鳥が浮んだりして、えも言はぬ眺です。けれども、なんだかぎきに飽きてしまふのは、やかましく賞められる英國の風景畫に飽易いのと、大した違はありません。イタリーの青空は眼も痛いくらゐ鮮かです。ナポリ(一)の白い建物の尖端をしつくりと限る濃藍とも、紺青とも、群青とも言ひ樣のない永遠相の空も、瞥見的感銘の激しいわりに、あとに殘る感じは大ざつぱです。何故でせう。

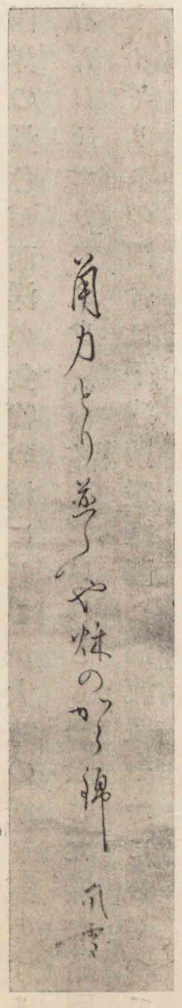
(一)Napoli. イタリー南部の都市で海港。その風光はヨーロッパ第一と稱せられる。
瞥見的感銘

(一)服部氏。俳人。芭蕉の門人。寶永四年(二三六七年)歿、年五十四。
(二)向井氏。俳人。芭蕉の門人。寶永元年(二三六四年)歿、年五十四。
(三)西山氏。俳人。談林派の祖。天和二年(二三四二年)歿、年七十八。
(四)北村氏。國學者で俳人。寶永二年(二三八五年)歿、年六十二。
(五)高桑氏。寛政十一年(二四五九年)歿、年七十三。

二三　黄菊白菊

黄菊白菊そのほかの名はなくもがな　嵐雪
秋風や白木の弓に弦はらん　去來(二)
名月や池をめぐりて夜もすがら　芭蕉(三)
白露や無分別なるおきどころ　宗因

角力とり並ふや秋のから錦　嵐雪



嵐雪筆蹟

まざ〳〵といますがごとし魂祭　季吟(四)
いなづまやきのふは東けふは西　其角(五)
小坊主の門に立ちけり秋の暮　闌更
山は暮れて野は黄昏の薄かな　蕪村

(一)江戸時代の國學者。櫪園と號した。熊本の人。文久四年(二五二四年)歿、年七十三。
(二)江戸時代の歌人。桂園と號した。鳥取の人。京都に住んだ。天保十四年(二五〇十三年)歿、年七十六。

二四　四季小品

一　春雨

中島廣足(一)

萱ふける軒は雨の音しづかにて、池水のあやこまやかなるに、いと深う霞める梢より、翅しをれたる鳥どもの、そこはかとなく飛びわたるなど、いといたうをかし。暮れぬれば、ましていとしめやかにて、見る書さへ今ひときは心しみぬ。風少し吹出でて、燈火のまたゝきたるに、何とも知らぬ花の香の、ほのかにうちかをりたるなどもをかし。

―櫪園文集―

二　風鈴

香川景樹(二)

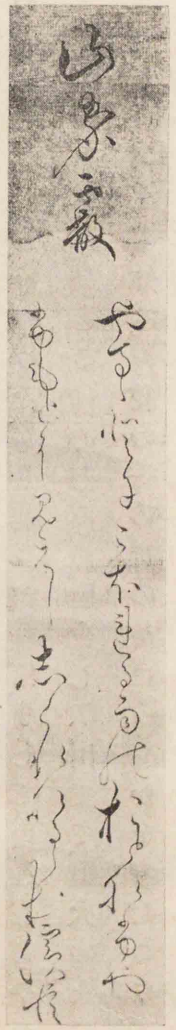
月の晴れわたり、花の散行くときゝを告ぐる、いと哀なり。かの入相、曉うち定めたるたぐひならんや。まして水無月の照る日かげろひて、竹の若葉、松の葉末、そよめきいでし夕暮に聲あはせたる、物

にも似ず。哀なり

三　きぬた

近しと聞けば遠く、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむもまたしきる。雁がねのきぬたをさそふにやあらん。きぬたの音の雁がねに通ふにやあらん。あなあやし。あなあやし。そもこの音の悲し

—かるかや集—　清水濱臣[一]



清水濱臣筆蹟

きか。住む里の寂しきか。打つをりの憂き故か。皆あらず。聞く人の心の寂しきなり。

四　秋の山田

秋の山田は夜こそ殊に寂しきものの、流石にをかしくはあれ。あやしの小屋に賤の男が起きゐて、ひた引きならしつゝ鹿猿を驚かし、谷水の流にかけたるひたの、おのれと音するなど、とりあつめて哀なる事多かり。かく心を盡してもるとはすれど、曉近うなりては、うちまどろむにやあらん、物の音なひもたえ〴〵なれば、小屋近く鹿の寄り來つゝ、何のかひよとうちなきたるは、いぎたなさをいさめ顔なりや。

—泊酒舍文集—　藤井高尚[二]

山家霰
やまゝとに
こほれる雨に
のおとなふ
やふもとに
見えししく
れなるらむ
濱臣

(一)江戸時代の國學者、醫者。泊酒舍と號した。江戸の人。文政七年(一八二四年)歿、年四十九。

(二)江戸時代の國學者。松の屋と號した。備中の人。天保十一年(一八四〇年)歿、年七十七。

五　冬のこゝろ

花咲き實なりし木も紅葉を限りに冬がくれ、木の芽春雨も時雨に變り、それも何時しか染めぬべき物なくなりぬれば、みぞれに移りて雪と積る。一歳の月日は隙行く駒の程もなきかな。振分髪のうなゐ子が大人しくなりぬと言はれしなん、やがて老のはじめにて、終にひげ髪の白くなりぬるをしもつく〴〵と思ひ比べて、埋火の許にのみうづくまるを、若き人々はさこそ見苦しと思ふらめ。我もまたしかぞありし。少壯いくばく時ぞ、老をいかん。」と詩にも聞ゆる

—松の落葉—　伴蒿蹊[一]

音なひ
いぎたなし

(一)江戸時代の國學者。名は資芳。閑田子と號した。近江の人。文化三年(一八六六年)歿、年七十四。

(二)「少壯幾時ノ分奈ヲ老何ヲ」漢の武帝、秋風の辭

(霰)

を、徒に朽果てぬる事の、今更に悔ゆるもかひぞなき。(一)前の車の覆るを後の車の戒てふ事もあり。我になぞらへ給ひそよ。冬は歳の餘りとも言ふを、この頃の雪を集め、長き夜を空しくないね給ひそと言はまほし。(三)老いては益、壯なるべしと勇みし人は、己が類にはあらず。唯寒きにたへねば、ひたやごもりに籠る程に、ねぶりは宵より兆して、

未飼花　伴蒿蹊筆蹟

しかも夜深くは目覺めぬ。冬も憂し。老も憂し。こは老の心をうつすとや言はん、冬の心をうつすとや言はん。

——閑田文草——

(一)「前車覆後車誡」(史記、賈誼傳)
(二)少有大志、嘗謂賓客曰、丈夫爲志、窮當益堅、老當益壯。(後漢書、馬援傳)

未飼花
らんかむに
よりてむか
ふもけふ幾
日あかぬこ
ころを花も
しらなむ　蒿蹊

二五　江戸時代の學者と明治維新

上下三千年の久しきに亙る我が國史中にあつて、幕府擾亂の時代程、波瀾に富み複雜を極めたものはあるまい。そして明治維新によつて我が國是が確立し、一意國運の發展に向つた新日本の歴史こそ、我が國力の世界に認められた光輝ある過程であつた。我が國史中にあつて最も意味深い感銘を我々に與へるものは、畢竟明治の歴史を以て第一としなければならない。そして多年政權を握つてゐた江戸幕府が滅びて、明治の新政治が行はれるに至るまでには種々雜多な原因があるが、これ等の原因なり動機なりを誘導した江戸時代の學者の隱れた働も、また見遁す事は出來ない。

抑、尊皇の思想は太古以來我が國民生活の大道であつて、いかなる時代にあつても、嘗て滅びた事はない。かの承久の役に當つて、北條義時の執つた態度は無道を極めたもので、天人共に憎む所であるが、それでも泰時(二)が兵を率ゐて西上するや、直ちに單騎馳還り、「若し乘輿親征あらばいかにすべき。」と問ふと、義時は沈思して、「若し乘

過程

誘導

(一)北條第二代の執權。時政の子。承久の亂に上皇方に流し奉つた。元仁元年(一二二四年)歿、年六十二。
(二)義時の子。北條第三代の執權。仁治三年(一二四二年)歿、年六十。

輿に遇はば、冑を脱ぎ弦を弛めて降を乞ふべし。諸將、師を督せば、千人が一人になるまでも戰ふべし」。と答へたといふ。卽ちかの義時と雖も、上御一人に對し奉つては、この心得があつたのである。さればこの江戸幕府の初頭、尙その全盛の時代に於て、かの近世學問の先驅をなした藤原惺窩(一)も、「天照大神は日本のあるじにおはしますけれども、宮づくりはかやぶきで、極めて御質素にあらせられ、天下の萬民を憐み給ひ、神武天皇そのおきてを守つて道を行ひ給ふによつて、代々榮え給ふのである。」と述べてゐる。爾來多くの學者の說く所も、その場合によつて多少違つてはゐるが、要するに、我が國の神國たる所以を述べ、我が皇統を至尊と仰ぎ奉る事は、我が國本來の大義であるといふ意味を力說しない者はないのである。

藤原惺窩

(一)名は肅。江戸時代初期の大儒。元和五年(一六一九年)歿、年五十九。

大義

我が國に於ける儒學は、朱子學、古學、陽明學などに分類する事が出來るが、その何れの學派にあつても、勤王思想を述べてゐる學者が多い。中にも名教を尙ぶ朱子學派に於ては、特にこの傾向が著しく、この學派に源を發してゐる山崎闇齋派の垂加神道や水戸學派の學問などは、最も顯著なものである。闇齋の高弟たる淺見絅齋(二)の如きは、楠木正成を讚美して至忠大功と稱し、自ら別號を望楠樓と言ひ、足利尊氏父子を「亂臣の魁」と罵り、終生處士を以て甘んじ、嘗て足東土を踐まずといふ程の氣節の士であつた。さればその著靖獻遺言(三)は、幕末勤王家の經典として尊ばれた物で、士氣を鼓舞する上に非常な功績があつた。また水戸學は天朝の正學とまで名づけられ、維新前にあつては、殆ど尊皇思想の淵源の樣に考へられたが、光圀(四)

山崎闇齋

名教を尙ぶ

(一)江戸時代の儒者。名は嘉。京都の人。晩年垂加神道を唱導した。天和二年(一六八二年)歿、年四十五。

(二)江戸時代の儒者。名は安正。近江の人。正德元年(一七一一年)歿、年六十。

處士

(三)二卷。支那楚の屈原から明の方孝孺まで忠臣、烈士、賢哲で時と名とを得ぬ八大節士の文を撰集し、その略傳を記し、また歷代忠臣の行狀を附記したもの。

(四)德川光圀。

が修史事業を起すに及んで、この學は特に維新史に大なる影響を與へた。そしてその結晶とも言ふべき大日本史の三大特色の一たる南朝正統論によつて、尊皇思想と離るべからざる關係を生ずるに至つた。特に栗山潛鋒(一)の保建大記(二)の如きは、保元以後建久年間に至る約三十年に亙る政權推移時代とも言ふべき史實を敍述し、これに嚴正な批判を加へたもので、尊皇思想の討究には最も恰好な著述であつて、或意味から言へば、水戸學の精髓とも稱すべき書である。蓋し水戸學は、一言にして盡せば、皇道を明らかにするにあつたから、苟も心を尊皇思想に寄せる者は、何人も爭つてこの學に就いた。

修史事業によつて國體の闡明を期するに至れば、おのづから國民の精神は國史の回顧に向はざるを得ない。彼等が國史を讀んで、蘇我氏の横暴、和氣清麻呂の誠忠、承久役乃至は吉野朝五十七年の

(一)水戸藩の儒官。名は愿。京都の人。寶永三年(一三六六年)歿、年三十七。
(二)二卷。
精髓

歷史を回想し、若しくは四方を遊歷して親しくその史蹟を踏む時、勃然として心頭に湧くものは、必ず悲憤慷慨の氣であつた。かくして彼等の多くは、或はこれを文に作り、或は詩に詠じ歌に寄せて、纔かに思を遣つたのであるが、その中で最も人心に強い刺戟を與へたのは賴山陽であらう。山陽は博引旁搜、錙銖を辨析するはおのづからその人ありとして、史實には俗書、軍談の類に取つたものが多く、その論贊なども神皇正統記や讀史餘論(一)などに據り、獨創の見は必ずしも多いとは言へないが、その長所は文に生氣があつて、よく讀者の心を動かした點にある。その著日本外史や日本政記は廣く天下に行はれて、北條氏や足利氏の惡むべく、吉野朝君臣の敬慕すべき事を一般人心に扶植した。

かくの如く儒學の方面から尊皇思想が勃興した間に、國學の發達はおのづから國史、古典の研究を促し、延いては國體の闡明とな

錙銖を辨析する
(一)十二卷。新井白石の著。我が國の上古から德川氏に至るまでの世の變遷を論じたもの。
獨創の見

つて、遂にその所論は期せずして尊皇論に達した。卽ち古くは下河邊長流、僧契沖に創つた國學の研究は、更に荷田春滿、賀茂眞淵、本居宣長と嫡々相承けて、次第に尊皇思想が濃厚になつて來た。特に宣長歿後の門人たる平田篤胤は、我が國を以て宇內第一の優秀な國となし、そしてこれは我が國が神國で、實に天照大神から連綿として數千年に及んでゐるのは他に求められぬ所であるとて、我が國の世界に類のない美しい國である所以を說いたばかりでなく、これを神道に結び附けて、盛んに皇室中心の神道を鼓吹したから、その門流も殆ど宗敎的狂熱を以て師說を信奉し、漸く風雲を捲起すに至つたのである。更に當時の尊皇論などに最も關係が薄いと考へられる蘭學者にあつても、長崎の西川如見の如きは、その著日本水土考に於て、日本は淸陽中正の水土で、開闢以來皇統今に至るまで變なきもの、萬國中唯日本あるのみとし、我が國の世界に秀でて

(一) 名は具平。大和の人。貞享二年(一六八五)歿、年六十三。
(二) 本姓羽倉。國學四大人の一、京都の人。元文元年(一七三六)歿、年六十九。
(三) 國學四大人の一。秋田の人。天保十四年(一八四三)歿、年六十八。
(四) 長崎の譯官。名は忠英。享保九年(一七二四)歿、年七十七。
(五) 一卷。日本の水土の他國に勝れた所以を主張したもの。

嫡々相承く

風雲を捲起す

ゐる所以を說いてゐる。その外、淨瑠璃や實錄、讀本などの作者でさへ、天子の尊ぶべき事を說いてゐる者が決して少くない。特に勸善懲惡主義の巨擘たる曲亭馬琴の如きは、盛んに楠氏や新田氏の忠烈を謳歌したものである。かゝる氣運の際に、寬政三奇士の一たる蒲生君平は、山陵の荒廢を慨いて山陵志を著し、遂に宇都宮藩主戶田氏の手によつて、山陵修補の業が企てられるに至つた。

蒲生君平

惟ふに開闢以來皇統連綿たる我が國にあつては、天皇の親政といふ事が根本の原則であるから、幕府の存在は實は政治上の變態と言はなければならぬ。されば學問の勃興すると共に、國史の淵源に遡つて研究する者は、誰しも我が國體の闡明に力めて、疑惑をこの間に挾まない者はない。かくてこの疑問が究明され、これを筆にし、これを口にして

巨擘

(一) 二卷。歷代御陵につき漢文で考證記述したもの。

世に問ふに及んで、世人も漸く思を茲に致し、加ふるに外國關係の漸く急なるに及んで、幕府も遂に萬策盡きて大政奉還となり、更に進んで明治の新政となつたのである。そしてこれ等學者の言論が、いはゆる國論の喚起に與つて最も力のあつた事は、固より言ふまでもない。

帝國讀本　卷七　終

大正十四年二月十二日印刷
大正十四年二月十四日發行
昭和五年二月八日訂補發行
昭和六年八月十七日訂正新制版發行
昭和六年十二月十七日訂正再版印刷
昭和六年十二月十七日訂正再版發行

帝國讀本
定價
自卷一至卷六　各金六拾錢
自卷七至卷十　各金五拾八錢

版權所有

編者　芳賀矢一
訂補者　上田萬年
同　長谷川福平

發行兼印刷者　東京市神田區通神保町九番地　合資會社　冨山房
代表者　同所合資會社冨山房社長　坂本嘉治馬
印刷所　東京市小石川區音羽町七丁目六番地　冨山房印刷部

發行所　東京市神田區通神保町九番地　合資會社　冨山房
電話九段一九二一—一九二五番
振替口座東京五〇一一番

HAGA 檢 賀芳
野本藏

昭和九年四月一日求

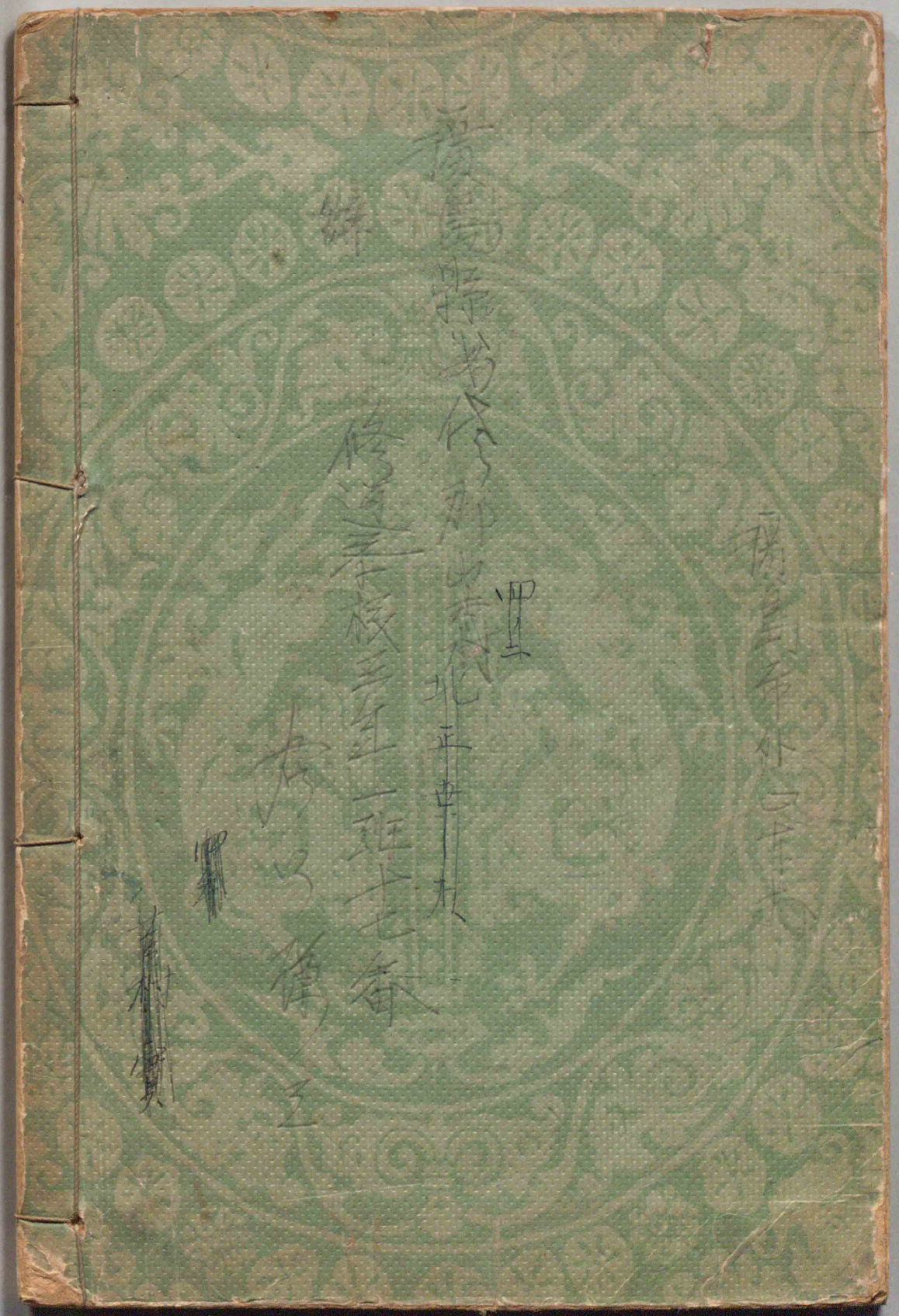
修道學校

第三學年甲班

十七番

[redacted]

四ノ二

[redacted]

巻ト源三